川柳の雑誌

麻生路郎★主宰

三月號

Pensoj flugas trans la land-limon

昔の旅はなか〳〵樂ではなかつた。

初旅は炙も仕度の數に入り
諸事たのみまするとあしをこしらへる
旅立は二度目のさらば笠てする

その點、今の旅行はサッと電車で一ト走りである。思ひ立つたら出かけることだ。

‖苦笑と哄笑で人生勉強‖

麻生路郎著 **新川柳評釋**

★どのページから讀んでもよい。面白いから引づられ讀む。讀み了つたら、川柳の味が判るといふ本である。

麻生路郎序　宮本又次跋
京大教授　本庄榮治郎博士　題字
戸田孤篷著

★定價八十錢（送料）六錢
★講外誌文は送料實費加算を乞ふ

川柳 **二千六百年史**

★本誌十七卷一月號より七月號まで連載好評を博した川柳二千六百年史に、大增補して上梓！

定價九拾錢
送料六錢

藤村誠一氏著　序　麻生路郎　跋　吉川則比古
百田宗治　裝幀　田村孝之介

詩人複眼

集想隨

★高鷲亞鈍が著者のペンネームだと云へば本誌讀者にはこの本が持つ魅力を想像することが出來やう。

定價壹圓（送費六錢）

發行所　堺市出島海岸通二丁目一八二番地　不朽洞
振替大阪三〇三九二番

路郎居雜感

（三）

明けても暮れても金儲けを念願として來た商人に、金儲けをすなといふ理屈が、どうしてものみこめぬらしい。

私は明治末葉に東京で贅澤の指導係とでも云つたやうな仕事をして來たので、物質的贅澤のいかに儚ないものであるかといふことを悟つて、人の金儲けのお手傳ひはしたが、自分で金を儲けやうなどといふ無分別はサラリと西の海へ捨てゝしまつたのである。それがために莫迦扱ひされたり、瘦我慢だらうなどと見くびられたりしたが、我れ關せず焉で今日まで生きて來たのである。明けても暮れても金儲けにあくそくしないために、どれだけ幸福に暮らせて來たか知れないと自分では思つてゐる。

貧乏人にはつき合つてやらないと手紙もくれなくなつた友人もあつたが、その友人が未だに僕よりも貧しい暮らしをしてゐるのを見ると、世の中には俺よりもまだ莫迦な奴がゐるのだなアと、ほほえましくなる時さへあるのである。金儲けをすなと云はれて、その理屈の、のみこめない商人達よ集れ、私はこれからあなた方に、その理屈を判り易く教へてあげやう。尤も、こんな事をかくと、その秘法を教へて貰ふのには幾ら要りますかと、すぐ金の事を云ひ出すかも知れないが、私の説明は秘法でもなんでもないのであるから、教へてあげても、一文も要らないのである。安心して聞いてよろしい。その代り聞いて見れば何んだそんなことかと云はれるかも知れないが、聞いて見て何んの不思議もないところに、この説の聞くべき値打ちがあるのであるから、そのつもりで聞いて欲しい。そして聞いたら正直に實踐して欲しい。若しあなたが實踐しないのであれば、あなたは又闇の品物にでも探しに歩かなければならないのである。私は言ふ。「あなたは碁をうちますか。」「うちます。」「賭碁をやりますか。」「やります。」「賭けなければ面白くないのですか。」「賭けなければ面白くありません。」「では、どんな氣まづい手でもうちますか。」「うちます。」「目的は金にあるのでせう。」「そうです。」「そこです。」「何處です？」「あなたと私の分岐點は其處にあるのです。」「あなたは碁盤がなければ碁をうたなくてもいゝ人なのです。」「電車の番號の偶數か奇數かを當てることであつても、野球や角力の勝敗に金を賭けてもいゝのではありませんか。」「勿論そうです。」「そこであなたの結論に近づいて來ました。あなたは金さへ得られれば、何んなことをしてもいゝといふのです。これがあなたの商賣の金儲けといふものです。」

「ところで、私は違うのです。私は碁の技術の妙味に陶酔するのです。そしてその技をみがくを以つて生命とするのです。」「それで生きて行けますか。」「行けますとも、無闇に慾がともなはないのでその技術は次第に向上の一路をたどります。そして私の妙技に對して、必ずそれだけの報酬が拂はれるやうになります。即ち碁の名人になることを志すのです。これをあなたの商賣にあてはめて見ませう。あなたはいかにいゝ品を作るかに腐心するのです。それが性に合はねば如何に廉い品を作るかに苦心するのです。そしてそれ自體の理想に近づくことを興味として生きて行くのです。私の近くの八百屋の親爺は至つて無口ですが、いゝ品を仕入れて來た時には、いかにもうれしそうに口數を聞きます。この八百屋の品は決して安價ではありませんが、喰べて拙いと思ふ品を仕入れては來ません。必ず安心して買へる品を仕入れてゐます。若し自分で滿足の出來ぬ品しか得られない時には何も仕入れて來ません。店は空々寂々です。彼は何んでもいゝ賣りさへすればいゝとは決して思つてゐないのです。彼は悠々閑々として、相當の成績を擧げてゐます。どうです。賭碁のやうな商賣を廢めて、ホントに商賣を樂しむ氣になりませんか。」

私の商人に對する説明はこれでしまいである。しかしこれは先程も云つたやうに實踐しなければ百の説法屁一つといふ奴である。

私はこの流儀で、川柳の專門家になつたのである。

川柳雜誌 三月號目次

表紙……（日章旗）……福井 哲

路郎居雜感……麻生路郎…（一）
飯の上の蠅……小山文三…（一四）
月評 川柳一ト筋 路郎・鮎美・某人・紫香・亞鈍・銳々…（一四）
直立不動の姿勢……大森風來子…（一四）
武玉川四篇研究（一五）……梅本塵山・森東魚…（一〇）・蛭子省二
滿洲聞書……吉田水車…（一三）
奥村丹路論……高鶯亞鈍…（一一）
雪の話から……高尾亮雄…（一四）
狸…（補追）……前田五健…（一六）
吟行地調べ 奈良篇……麻生路郎…（一三）
如露を捜す……古川風竹…（一九）
貝釦……岡田某人…（一四）
滿洲雜記……渉淺小城子…（一六）
掌篇 川柳愚談……小畑自由期…（一五）
旅で家で……蛭子省二…（一七）
會・會・會……不死鳥…（一五）
雪の夜の思ひ……出橋本美奈子…（一八）

★

近作柳樽……麻生路郎選…（一六）
川柳塔……麻生路郎選…（一六）
同舟近詠……諸家…（一三）
一路百姓……魚住滿潮…（一八）
集
各地柳壇……（三〇）
川・協……（一八）……柳界展望…（一九）
後記……（三五）……社關係の人々…（三六）

奥村丹路論

Ⅱ

高鷲亞鈍

Ⅲ

昨年の、九月三越で本誌の二百號記念川柳大會が擧行され、僕は〃川柳理論と作家の態度〃の演題の下に講演したが、萬一聽講された方があつたら僕の以下言はんとする意圖は充分御理解を得ることゝ信ずる。即ち川柳を二つの主流に分け、一つを詩川柳他を散文川柳とした。川柳とはもともと散文であり散文の世界であり、詩川柳とはそれ故に詩的精神による散文であり、散文川柳とは散文精神による散文であると概念規定を置く換言すれば詩を散文で書くことを詩川柳とし、この場合は十七音字詩になり、散文を散文で書くことが散文川柳であり、これは十七字綴詩になる。前者は主情、主觀の態度でロマンチシズム後者は客觀の態度でリアリズムであるとする。

凡そ文學の主流はこのロマンチシズムとリアリズムに分けられる。前者はプラトンの起源を持ち後者はアリストテレスの起源を引くと通常解釋されてゐる。川柳もこの二つの流れに見る事は必ずしも不思議でない。大體柳壇に於て、現代川柳といひ傳統川柳といふのもこの二つの觀點から考察され得る事柄である。

さて前月號に御紹介した奥村丹路氏を思つて戴けば、彼は既に詩川柳作家としての存在を肯定されるものがありはしないか。而し乍ら、川柳の發生起源から考へて詩川柳であるよりも寧ろ散文川柳に、川柳の正統性を認め得るのは一般の通念であり、それは冷視客觀の所謂諷刺、諧謔等のサチールが生じ、人生批判の鋭い眼が向けられる。其處に、作家の感動性、獨白、祈り等の主情は排擊されなければならない。其故に柳壇は久しくこの散文川柳以外に川柳無しと考へられ、その範圍内に於てのみ句作が續けられてゐたが、その功罪に就ては大いに論じたいこともあるが、それは別の機會に讓るとして、麻生路郎師は斯る川柳てふリアリズムの精神以外に、詩川柳なるロマンチシズムの精神を柳壇に鼓吹し、かくて柳壇にも文學思潮の一主流を確立せしめた功績も亦大きなものがあつたのだ。路郎師のかつての句、

君見給へ菠稜草がのひてゐる

夕櫻とんぼ返りがしてみたし

酒とろりとろり大空のこころかも

等の一連の名句によつて、主情的な句作をなされたことは既に讀者の御承知の筈である。奥村丹路氏が、その性情からして、川柳の僅かな期間を古川柳作家の溪花坊に最初師事し、幾干もなくして路郎師の門下に走つたのは當然である。凡そ句の價値とは如何なるものか、といふ事は暫く措き、路郎師の選句は從來の川柳の狹隘を打破し、振幅のある各作家の主觀、個性とするところをいち〳〵認める點に於て選者として斯界の第一人者であり、その意味に於て句の價値轉換といふ劃期的な仕事を樹立されたのである。何故なら、川柳の正統からみて、作家の主觀、個性は沒却す可き筈のものであり、それがリアリズムの精神でなければならなかつた。路郎師が、その門下奥村丹路氏の句を選した事は、丹路氏にとつては、良き伯樂を得たことであり、普通沒句にされるものでも、路郎師の選によつて何でもない句が躍如とし、生動する。それは現在或ひは今後僕以外の人によつて見事な丹路論が成立されるものなら、それは筆者でもなく、當の丹路でもなく實に路郎師の選句態度でなければならない。

Ⅳ

さて以上に述べたことによつて丹路の句が明るみに出た場合、從來唱へられてゐる所謂名句を發見することは困難であり、近く句集上梓の準備ある彼の句を一纒めにして詠む時、その句の聯繫によつて、各一句一句は叩かれる美しいピアノのキーの音色のやうであり、雄渾な大交響樂でないまでも室内樂のあのセレナーデを聽くが如くである。例へば

泣きたい心で笑へば頬つぺたかたい
（昭和五年）

感情の凝固が悲し蜜柑むく
（昭和五年）

石蹴れば秋の音してころびゆく
（昭和六年）

死んだふりして蜘蛛よ淋しがらすな
（昭和六年）

淋しさが細い肩からとんできた
（昭和六年）

溜息をすれば散りゆくものがあり
（昭和七年）

人みんな後姿となるもよし
（昭和七年）

風よ吹け〳〵風の中なるひとりぼち
（昭和七年）

冬の風景を我れより先にゆく男
（昭和九年）

病人がおしえてくれた雨の音
（昭和十年）

怒りとはさびしきものをもつものよ
（昭和十一年）

妻のおもひ夫の思ひ淋しくも言ふ
（昭和十三年）

蟋蟀のやつぱり石の下で死に
（昭和十五年）

等の如きものである。丹路が、先に述べた僕の詩川柳的態度の人であるなら、斯ういつた感傷の句の多いのは當然である。この内、名句として柳壇に喧傳されたものも尠くないが、然し感傷の句、必ずしも詩川柳の全部を占めるものでは勿論ない。殊に句にセンチメンタルなものゝあることは、その年齢と脱み合して一概に否定出來ないが、それが少女趣味的な安易な感受性でなく、生活經驗に裏打ちされたセンチメントは、濾過した純粋性故に首肯されて可いと考へる。たゞ、悲し、寂し、侘びし、といつた言葉の持つ抒情に句のリアルを溺らしてしまふ點を警戒す可きではなからうか。その意味で、「妻のおもひ夫の思ひ淋しくも言ふ」

の「淋しくも」は明かにこの句の素材が「淋し」に溺れてしまつたかたちである。「怒りとはさびしきものをもつものよ」は怒りをさびしきものと氣付く作者の感情の表裏であり、怒りと寂しさを心理學的に扱つた點で、この寂しさは咎める可きでない。句のいち〳〵の批評は煩瑣であり、徒らに紙面をとる故に省略して、次に、丹路氏の句にのぼつた女性及び女性觀を考へてみるのも興味ある問題であらう。

V

それは丹路に限らず、凡そ男性たるもの、人類の半數である女性に目が付くのは當然中の當然であり、女性は又男性から目を付けられるやうにだけ生きてる代物なのだ。などと僕の女性觀はこゝでは控へ、一體丹路の女性觀は比較的冷酷なやうである。或ひは川柳作家として身を外に一歩退かして觀察するといふ習癖がその素因にあるとしても、その女性の美醜、或ひは夫人、令嬢、娘、少女、乃至は醜妓、女給、娼婦等の色衒の女性に至るまで、それ〴〵の地位、環境、立場を承知した上で彼は交渉してゐる。そして彼が如何に愛情を抱き、戀愛の對象を持つとしても、それら外部的な事情によつて遂ひに彼は戀に盲目となり得ないのである。恐らく、富裕の曹子で而も優れた美貌の彼には、彼よりは女の方が、何倍もの愛情をつのらして蝟集したことではあらう。

（奥さんへ。これからは私の想像で御座います）だが其麼場合でも、彼は、彼女らの地位とか環境、立場を見極めずして、意を動かすことは有り得なかつた。それは一つは彼及び彼自身とその周圍を自覺することを幼少から敎へられてゐたし、それが後天的な性格となり、倫理的、道德的な嚴しさとなつて、嬶〃丹路さんは水臭いわ〃と怨みの言葉の一つ位もかけられるのではなからうかと考へる。そして女性とは凝つとながめて美しく觀るものだ、といつた結論が丹路の女性觀から引出されさうなのである。今、假に、

春なれば春の姿の令夫人
（昭和五年）

春泥に少女は細い脚をたて
（昭和七年）

お孃さんあなた自身が神祕です
（昭和八年）

あしの裏のうつくしき坐りやうかな
（昭和十年）

うつくしうは見し朝霧のおんな
（昭和十年）

淫賣婦の生きてゆく道など思ひ
（昭和十年）

裾ひいて立てば藝者の壯麗な
（昭和十一年）

等の句を拾ふてみると、凡ゆる階級の女性を心憎きまで描寫し、女性を一つの美しい風景にみて、眺めてゐる丹路の姿が思ひ出されるし、これをやや世俗的な川柳家の眼でみた彼の世話物的な句にも

母の眼のもつたいなくもほどきもの
（昭和七年）

市場通ひの財布を帶にねぢこんで
（昭和八年）

古典的な愛情を纏ふお主婦さん
（昭和八年）

生活の一部としての長襦袢
（昭和九年）

車蹟下をなほ隅落の眉をひき
（昭和十三）

などあつて、斯ういつた句の表現、觀察は必ずしも丹路を俟たずとも散文川柳作家も亦作り得る可能性があるとして、僕は餘り採られないのである。そしてやはり丹路としては、多少とも主情的な作品に、丹路の良さがあり今後も進んでゆく道であらうと考へる。しかも彼のさういつた詩川柳には既にその表現に彼のオリヂナルなるものが顯れつゝあり、その初期にあつては路郎師の調子の影響があるが、昨今漸く脱却して、やがて丹路調なるものが創造されつゝある氣配すら感じるのである。

此れらに擧げた女性の句は、作者と私的には先づ關係のない女性達で、それは單に女性の觀察描寫に止まる。其處で、作者の生活の上に些かでもタッチした女性とその句を拾つてみやう。然しそれにしても丹路の女性觀は、女性觀の故に客觀性を持ち、戀ひこがれる激しい愛慾の世界はなく、淡く儚く侘しいプラトニックな愛情をみせてゐる。けだし彼の詩人性でもあらう。今丹路の方から寄せる愛情の句では

歳上の女を戀ひぬ梅雨ちかく
（昭和五年）

嘘の愛でけつこう僕は泣きますよ
（昭和六年）

初戀

姐さんの頃をみつけたまつげまつげ
（昭和八年）

つながれる血を何となく倦れ
（昭和八年）

愛の話題の斯くも少なく
（昭和九年）

たゞ寒いだけの逢曳してもどり
（昭和十年）

きみのほか誰も戀しうない日あり
（昭和十一年）

魂をあづけるものがひたにほし
（昭和十一年）

といつた工合に、よし彼にラバア・フエアーがあつたとしても、その事件は纏綿ともつれ合ふといつたものでなく、愛人を遠く切なく情思ふものであり、讀者はその句から桃色の匂を嗅ぎ出せば可いのである。而し乍ら彼は男性の誰かのやうに決して女性を輕蔑しない。輕蔑し憎惡しなければならない致命的な打擊を受けた不幸な男性ではなかつたとも言へるであらう。

尊とからずや遊女人間
（昭和五年）

死を語る女ごころを叱りしが
（昭和五年）

反抗をするすべもなし帶をとき
（昭和九年）

淫賣婦くには信濃の雪深き
（昭和九年）

袖口で眼鏡もふいてくれしおんな
（昭和十年）

たりなさは言はず女は聞いて呉れ
（昭和五年）

氣儘なんでせうかと令孃の不滿
（昭和五年）

あゝなんと彼の前に現れる女性の美しく、いぢらしく、愛しくもあることだらう。彼が女性に對して甘いといふのではなく、假令それが、遊女であらうと、娼婦であらうと女性として愛する心情に僞りがなく、又階級、立場の如何にかゝわらず、彼に接する女性は、彼の情味にたわいもなく惹きつけられる。然しそれは許されない及ばざる戀として、彼の眼鏡をせめて袖口でいつくしみつゝ、その愛の曇りをそつと拭ふ女性であつたのである。だが飜つてみて、その女性の斯る行爲を敢てせしめその緻やかな愛の表現を、懷手してながめてゐる作者、丹路は憎たらしい男である。僕にそんな愛人があるなら、相談によつてはたちどころに一緒に死んでみせるんだが、彼は〃死を語る女ごころ〃を馬鹿な眞似はしなさんなと叱るのである。怨めしいのは女性ばかりでなく、斯る卑怯な冷たい男に義憤を覺える僕みたいな男も居るのである。だがそういつたブラウニングの戀愛至上主義は十九世紀のロマンチシズムであつてみれば、男子の使命は、そして生命は女性の手で左右さる可きではない。時恰も戰時下の非常時局に際することを惟へば邦國を憂ふる男子の面目にかけて絶對に斯る愛情の極致は否定す可きである。

（未　完）

直立不動の姿勢

（陣中日記）

大森風來子

六月〇日

六月の太陽を受けて乾燥しきつた大陸は、地獄のような猛射をはねかへしてゐた。〇〇任務の爲め輸送されてゐた〇〇部隊の一員として、私は燒けついた鐵板の貨車に、搖られてゐる。

がり〳〵、ぎり〳〵と土囊で積まれた淺瀨を、のめるように過ぎて、ほつと一息ついた車窓は、幾分速力を增した。

兩側の入口は古兵殿が、頑張つてゐて、外の風を僅かに受けながら、暑さを凌いでゐる。私は貨車の中程に位置して、背囊に體を寄せ掛けて、投出した兩脚は、戰友の腰に押さへられて、身動きも出來ない、背囊の置き場所がない兵隊は、捕錠繩で天井からぶら下げてゐる。隅にゐる兵隊は、銃を壁に立てかけてゐるが、私の中程にゐる兵隊は、腕で銃を抱いてゐる。

ゴトン〳〵、不意に大きく震動して、背囊が搖れて、頭の上に落ちそうになつた。急に汽車が止つてしまつた。

一貨車、〇〇名の兵隊が、重なり合ふように、つめ合つてゐる。不意の敵襲に備へて、卷脚袢も帶劍も取れない。戰闘帽でバタ〳〵煽いで、ゴシ〳〵と汗を拭ふのである。動いてゐれば、幾分風があるが、停車すると一陣の風もない。鐵板に蒸されて、たら〳〵と汗が流れて來る。暑い〳〵と、さつきからこぼしてゐる隣の戰友に向つて、「まだお湯が充分沸いてゐませんね」と言つたら、皆んなくす〳〵笑ひ出した。成程、お湯に浸つてゐると思へば、もう少し暑くなつても凌げると思つた。

私は戰友の肩をまたいで、入口から外へ飛び下りた。ぢんと大きな震動が、體内へ傳つて來て、頭がふら〳〵とした。

ひどく痩れた兩足を引き擦つて、楊柳の影に立つた。小さな驛で、後部にゐる私の貨車は、プラットから遠く離れて、停車してゐる。私はぱた〳〵と大地へ四股を踏んでみた。

高粱はもう、二尺位伸びて、見渡す限りの畑である。遠くに點々と茂つた樹木が見える。あの邊りにも部落があるのだらう。この高粱が、一ヶ月もしたら、背よりも高く伸びて、敗慘兵の隱れ場所が出來てしまふ。それまでには、〇〇の敗敵をやつつけねば面倒だと、出發前に中隊長殿から注意があつた。

「ピュン〳〵」

ふと、私の頭が、痙攣を起して、縮み上つた。さつと緊張した私は、耳を澄したが、もう銃聲は聞えなかつた。彈丸の唸りから察するに、相當遠距離だつた。而も西から飛んで來て、貨車のはるか上を通りすぎたのである。ぞろ〳〵貨車から兵隊が下りて、わい〳〵騒いでゐるので、銃聲に氣を止めた者はなかつたらしい。驛長が赤旗を振つてゐる。間もなく發車するといふ合圖である。ぞろ〳〵兵隊が歸つて行く。

ふと私は貨車の屋根の上から、手招いてゐる戰友に氣がついた。何時の間に上つたのだらう。召集前は鐵道の機關助手だつた本田君と、驛手だつた久山君である。成程これは涼しいだらうと思つて、私も屋根に攀ぢ登つた。重い兵隊靴が辷つて困難だつたが、貨車の間の兩側へ

手をかけて、懸垂の要領で巧に上ることが出來た。

班長殿から、軍隊の體操の目的はと聞かれた時、私が手を上げて、「身心の鍛錬であります」と答へて叱られたことを思ひ出した。その時班長殿はこう說明した。

「戰場に於けるあらゆる動作（溝を飛び越えるとか——城壁を攀ぢ登るとか——凹凸の曠野を疾風の如く傳令の任務を果すとか——）を圓滑に行ふ爲めの豫備運動である。」

成程今私が難なく貨車の上へ登れたのも、班長殿から敎育を受けた體操のお蔭であると、感謝の念を抱いたのである。

私達三人を屋根に乘せたまゝ、又汽車が動き出した。何年か昔、私も汽車が着くと屋根へ上つて、給水作業を專門にやつてゐた驛手時代を告白せなければならない。三人共同じ鐵道で、同じ釜の飯を食べてゐたのである。

「こんなところで、元の商賣が役立つとは思はなかつたよ。ハッハッハッ……」と笑ひ合つた。

下にゐる貨車の中の戰友を氣の毒に思つた。風あたりはいゝし、見晴らしはいゝ。何時も自然を宿とし、自然を友として闘つて來た私は、久し振りに空を見上げてうれしかつた。地上の慘憺たる悲劇の上を、靑空に浮き出たように雄然と千切雲が流れてゐる。おい！眠つたら落ちるぞと機關助手の本田君が不意に叫んだ。私はハッと貨車の上にゐる自分に歸つた。

ゴト〳〵汽車は何時の間にか、小高い丘へさしかゝつてゐた。一本の草も見えない。石ころが、ごろ〳〵轉つてゐるような丘だ。その石ころの間から、銃眼が開いてゐるような錯覺を否定しながら……「敵のトーチカが見えるよ」と叫んだ。いたづらで言つた私のユーモアも、何んの反應もなし「さうか〳〵」と言つて見向きもしてくれなかつた。二人とも、ゆつたりと轉んで、假睡をむさぼり樂しんでゐる風で、私は何んとなく物足らなかつた。さつき「落ちるぞ」と言はれて、はつと取亂した私の動作が、恥かしいものになつてせまつた。

私は胴體のバンドのあたりへ、腰から拔き取つた捕錠繩をぐる〳〵卷きつけた。その兩端を屋根に突き出た鐵棒に結びつけた。もうこれで落ちる心配はない。私は勝ち誇つた將軍のように「おい名案だらう」と戰友を搖り起した。「これはいゝ〳〵」と言ひながら二人とも捕錠繩で體をしばつた。

坦々たる曠野を、何時までも一直線に走つてゐた列車も、丘へさしかゝつてからは時にカーブする。その度に假睡を搖り起された。太陽の猛射を左の腕でおほひ、右の腕を枕にした。今朝二時頃乘車した時、間もなく闇の中で敵彈の見舞を受けた。ローソクの灯を消して、窓口では煙草を吸ふてはならぬと班長が注意した。さつと一齊に緊張したが、敵はめくらめつぽうに擊つて來る。しかしこれしきの敵襲は殘念だが、まご〳〵しておれぬ。重大な任務の爲め急行してゐるのを口惜しがつた。私は背嚢にもたれたまゝ、銃聲を聞いてゐたが、何時の間にか眠つてしまつた。夜が明けてから、騷々しいので眼が覺めた。負傷者が二三輛前の貨車から、四五名出たと聞かされた。私の貨車は全員無事だつたが、貨車を突拔けた敵彈の跡が無氣味に數個發見された。

この邊り一面、敗殘兵がうよ〳〵してゐる。本當にトーチカがあるかも知れない。若し……あつたら、貨車の上の三人は、懸賞付で最先に狙擊兵に狙らはれてしまふ。……そんなことをうつ〳〵考へながら……幾日か續き重なつた睡眠不足が私を正體もなく、貨車の屋根上に轉がせてしまつた。

× ×

輸送指揮官殿が長い日本刀をぶらさげて、プラットを歩きながら「降りろ」と怒鳴つてゐる。慌てゝ眼を覺したが、腰に繩がついてゐたので私はひどく狼狽して飛び下りた。今汽車が着いたばかりである。三人だけ乘つてゐた等の貨車の上に、何時の間に上つたのか、前の車も後の車も、澤山兵隊が下りてゐる。玩具の汽車から蟻が下りるようで、飛び下りるものも、ぶらさがつてゐるものもある。私は不思議に思つて見てゐると、本田君が來て言つた。

「隨分君はよく寢たね。幾ら起しても、危い！敵襲だ!!と言つても起きなかつた。內地のいゝ夢でも見てゐるのだらうと思つて、ほつて置いたが、君の體が段々ねぢれるので、何回となく直すのには弱つたよ。途中○○驛に停車したのを知らないだらう。あそこで兵隊に見付けられてね。こんなに澤山上つて來たのだよ」

私は何か他人事のやうに、眼をパチ〳〵させるばかりであつた。一時間はぐつすり眠つただらうと思つた。私の時計は五時を指してゐるが、あてにはならぬ。腹の減り加減や、楊柳の影の長さからまだ三時頃だなと思つた。少し眠つた故か、私は頭が輕くさば〳〵と氣持がよかつた。

「全員整列」何事なりやと中隊長の前に集つた。前方の鐵橋が三ヶ所破壞されてゐるので、復舊するまで此の附近で駐屯だと聞かされた。そして最後に大きな聲で附け加へた。戰爭を明日に控へて、貨車の屋根の上で空を見上げて寢てゐた兵隊がある。大膽無敵であつて、愛すべきものがあるが、……誰も人命に異狀のなかつたのは幸である。敵の彈丸が飛んで來ない處で、生命を輕々しく投げ出してはならぬ。恐れ多くも君達の體は、故鄕を歡呼の聲に送られて出た時から、君達のものではない。もつと大切にし給え。わかつたか」

「はい！」

と私は誰よりも大きな聲で、直立不動の姿勢を取つた。

川柳塔

＝路郎選＝

桁はづれだから見込のある男
シヤンだなと思つてる肩叩かれた
肝腎のところ大使も日本語
スペシヤル・ルーム女も顎を引く
賣食ひの内はまだしも樂だつた
總掛りやつと赤子の爪を切り
正論の度に世間が狹くなる

ハワイ　高澤一浪

ストーブの側から馬の呼吸をみる
紙芝居へ横目紙芝居屋も横目
科學萬能しかし機械は狂つてた
統計學嘘の効用考へる
千客萬來ストーブ一つあるからさ

大阪　戸田孤篷

母病む

あゝ今日も日めくり拜む母の無事
職域と母のいのちにふと迷ひ
俺は醫者だそうして母の子でもあり
病む母が俺の夜汽車をいとしがり
うどんさへ豫約でないと食べられず

大阪　中島生々庵

兵庫縣川西町　戸倉普天

十日戎に吉兆を買ふ

丸亭の吉兆買ふはたよりなし
川一つへだてて村の隣組
三つ兒生めと無理ばつかしをいやはつて
稅務署で骨を拔かれて戻つて來
時節柄おかげでと代書ほざいたり
居酒屋へ村のデマ屋が集つた
無禮講但し席次は嚴として
生殺しの蛇はたたると知つててか
應召へ半分殘る美顏水
公德を守れば發車してしまひ
奉公日だけしつかりせいと云ふ如く
家ダニへお隣組の勢揃ひ

鞆知山　小畑自由朗

布哇在留第一世（四句）

三年と誓つて鄕關出た筈が
一旅の夢、夢みつゝ古稀の齡
永住ときめて戀しい故鄕の森
泰然と腰を据ゑてるのも淋し

ホノルル　岩崎山石

布哇の正月

初詣り日米親善祈つて來
貯金額日記初めにしかと書き
緣談へ先づその母を見んと云ふ
囑託狀世をすねたのに追つかける
金曰くとんだ所へ寄つて來た
家の內たゞ廣うして兒は旅に
むしバンに似た雲一つ冬の空

大阪府高石町　米本貴志子

運動はよいが空腹如何にせん
女事務マスクのまゝで勤めて居
留守番は婦人朝日も讀んでみる

大阪　橋本綠雨

支那料理湯のししさうな物を出し　大阪　高橋かほる

左團次の忠彌の額に小間は更け
親籍で聞けば先祖が又違ひ
燻るは餅の欠けなり暦置き

横濱　福田山雨楼

繃帶の白さが冬をきびしくす
太平洋戰略論を讀み直す

北海道の旅を前にして

渡道して雪の純情さに觸れん

兵庫縣　奥村丹路

跪き掌を合せ女石の前
飯を食ふときに豐かな顏ふたつ
時雨の日いづこともなく嫁にゆき
かゝる時松にのぼりて山を見ん
ごの汽車もふるさとを戀ひ去りゆくよ
人死して晝をあざむく灯がともり

張家口　岩崎柳路

愛人と別れる術も人の道
金持つて居るから戀もなしとげた
君は馬鹿か利口か判らんと叱られた
支那風呂で逢引らしいのと出合ひ

戸屋　寺井鋭々

蝸船に來ても舊師の端然と
責任を持つやう河豚へ誘うてる
鷹揚に袴をはいて金を借り
重量へ馬は怒つた顏もせず
折鞄のふくらみほどの用もせず

★

見合とは知らず素顏のままで來る
共稼ぎとは知らぬ故郷
北支から母のモンペをほめて來る

下關　濱田賢次

故郷が見えてネクタイ締めなほし

廣島　大森風來子

廻覽板今日は詩人のお家から
大根の短さ笑ふ休閑地
御無心に連れて來た子の背の熱
娘時代薄桃色の部屋にする
經理部に居て家計簿が合はぬなり

讀上げ珠算競技會

砂濱をさら〳〵洗ふ波に似て
山道で母の荷物を花に替へ

岡山　鈴木九坡

あの雲がまだついて來る三等車
嘘つきに出る夜マスクなど掛けて
貸家など持つて手の皺眺めてる
沈思默考の顏が搖れてる三等車
隣人愛下手な尺八きいてやり
街の參謀同志意見が一致せず

岡山　逸見灯竿

孝女傳婚期は既に逃げてゐた
米國は强氣日本尙强氣
よく見れば己れの爪も黑かりき
捨てたものまでも先生へ屆けに來
保護者會よくも此の親、子に似たる
革新派三人寄つて猪口が冷え
先生の嘘テヨークの粉を散らし

流感に襲はる

午前四時炭火に寢卷光りたる
欲しがれば冬の日の柿さがして見
急患へ醫者は一服吸ひつけて

兵庫縣　西川青美

ラッシュアワー麒麟や家鴨が改札へ
超滿員子供のありか聲で知れ
冷えた手はまづコーヒーを握りしめ

澄みきつた獨樂の生命を見守りぬ　岡山　森本素木

浮世とは藁一本へ手が二十

義は高し土管ぐらしにある仁義

戰のなき日は土へかへる日か

偶像へ自己中心の掌を合す

妻の茶へ客となるのも春心　大阪　夷一笑

あかぬけのしてゐるわりに嫁き遲れ

寢不足を床屋へ行つてねるときめ

からたちで垣を作つて高利貸

長男出生

正直に買溜もせず子が生れ

孫抱いて母はうれしい一人ごと

兵隊になりますねやと湯を浴びせ

子が出來て自已の力を見つけたり　兵庫縣　水谷鮎美

カンテキの焔は子らをたのしませ

せんだくのはたちのころのあさきいろ

よい話霰は鼻へかるくおち

二月五日誕生日

鯛の話して何んの魚か膳にあり

中支の森山軍曹殿

臣道實踐故國は櫻の花ざかり

詳はしくは考へる内寢てしまひ　奉天　吉田水車

祝里十九氏令息結婚

新體制がつちり受けた賴もしさ

何もかも新體制と社長逃げ

小包は内地のにほひして屆き

廻覽板いつち終ひは張らされる

翼贊の春へ雲雀も高くゐる

銃聲もなき宿直が淋しくて　大阪府柏原町　宮岡白峯

慰問文賴まれてゐる歸還兵

㊗を貼つて商賣人の春

新體制いのちはるかにみつめゆく　松本　石曾根民郎

鄕土色いちにち雪の降る灯なり

硝子戸に映る世相が身近く來

吸取紙舊體制を知るものか　大阪　中西おさむ

變なひとからの電話へ脊廣のボタンをかける

流行作家の活字とりまく女達

指輪はづしても愛玩用の犬がゐる　大阪　正本水客

案外な構へ一遍ゆきすぎる

女教師のそれから先をよう云はず

新任の先生と同じ方へ去に

いつ見ても變つた本を持歩き

出迎への向ふも月に手をあげる

連絡船動いてゐるに氣付く雲　豐中　黑川紫香

停年を一と月前に風邪で死に

にはとりが二羽郵便屋に追はれて來

隣組どちらもさんま燒いた宵

散髮屋鋏で煙草切つて立ち　大阪　丸尾潮花

子寶が有り停年を稼ぎに出

大聲を出せばこわがるかと思ひ

燒香の順番を待つ隣組

さよならも云はず別れたことをくひ

化粧するために稼ぐのかと思ひ

まつすぐに歸れと肩を一つ打ち　神戸　岡田某人

目をとぢよ目をとぢよ目の中に童話

豆炭のほのほに印度古經寂と

喪乃女史へ

あれもこれも咲く春になるのですがさて　アート君へ

一つ一つの砂の陽の明るさを御覽　丹路君へ

鼓あぶつてゐても似合はむ膝の人　尼崎　酒井斗風

ふるさとを云はぬ男で孤獨也

長男次男の鼻の低さを見飽きぬ日

優越をなにかに感じ夫人生き

なにげなき揶揄が夫人をおこらせる

慰問袋馬もうれしく顏をよせ　大阪　北川春巢

風邪引いた位でこりぬ無帽主義

踏切番の愉悅百人程待たし

お針屋の猫チャン〳〵を着せられる

果物屋だけが時局に派手な色　大阪府　西尾栞

叱言もう解り子供等母につく

信貴生駒親がついてる凧上り

泣きやまぬ子へ倉の鍵がちやつかせ

配給をして頂戴と土産物

どちらにも似ず赤ン坊猿にいつち似る　下關　櫻川不水

女房にだけはかけ値のないくらし

號令で云へば子供が兵になり　西南役を憶ふ

田も家も捨てた魔道の父なりし

拔刀隊さしづめ金鵄と云ふところ

重圍破り祖父人吉の露と消え

一ふりの形見もなくて母と子と

祖父さまの武勇に泣きし母も亡く　廣島　濱田久米雄

殘るべき人が殘つたゞけのこと

希望崩れんとしてラヂオに勵まされ

催促をしてゐる方が氣が疲れ

手を膝に置いてつめたいことを云ふ

猛犬に御注意春の風が滿ち　大阪　魚住滿潮

職域奉公僕は天下の靴磨き

波の音三日も聽いて居れば飽き

大阪驛愚息を神として迎へ

掬摸だ〳〵千日前は宵の雪

何々會奥様今日も朝から出

お說經勿體ないが欠伸が出　大阪　清水友帆

南進論冬でもビール呑む男

「簡素の中の美しさ」のポスターが破れてる

企業合同もと犬猿の中なれど

父子二代汽車を製造する會社

轉業は辨當箱のゐるところ　大阪　清水史路

はたらいて寢る正月も久振り

醫者の眉この部屋ではと云ひたそう

歷史創る臣道踐まむわれも又

機上フト早篤思ふほどに搖れ

一本の日本盛へ車内の瞳

御夫人の欠伸へかなし急停車　大阪　中内翠芳

一億がガツチリ組んだ手と手と手

選擧法さても分家の殖えること

隣り組がガツチリ組まう先づ組もう

眠りと死あゝ人生の寂けさよ　下關　多田市多樓

寒村の此處にも公定價額表

さりげない返事忠告とも知らず

大時化に來合せ旅の夜の二人

珍客の座敷の蟻を見つけられ

武玉川四編研究（十六）

梅本塵山
森東魚
蛭子省二

(407) **秋袷冬瓜のうそのつき仕廻**

東魚＝秋口になつたので、西瓜と僞る冬瓜も、もう仕廻ひになると云ふのか、甚だ不安である。

塵山＝冬瓜の啞が不可解である。

省二＝袷は夏の季故に、特に秋袷といふ。冬瓜のうそがわからぬ。「冬瓜の花の百一つ」なる俚諺が頭に浮ぶのみ。仇花が多くして結實する少なきをいふ。句のウソとは、この仇花を指すものらしくも思はれるのだが。

塵山＝秋袷を着る頃になると、冬瓜の徒花の咲くのも終りである、と云ふ意歟。

(408) **給仕かあれは喰ぬ迷子**

省二＝迷兒は馴染むまでがむつかしい。給仕などせず放つて置けば、獨りで食ひだす。（迷子を取扱ふ警官の話にもよくある。）

東魚＝人みしりして、落ちつかぬ心持ちが出てゐる。

塵山＝事實ありさうな句で、無技巧なのが大いに宜い。

(409) **障子張男の心うちへ透**

東魚＝「障子張る男」か。「障子張り」か。前者なら、ルを捨てさうに思ふが。何にしても男が障子を張つてゐるので、深窓の佳人を一寸かいまみでもした趣ではないか。

塵山＝前解の如くであらう。男の心が障子の中にゐる佳人の上に移るので、これに似た實話があるけれど、茲には書けぬ。

省二＝適解と思ふ。障子張は趣きのある仕事だ。情愛を結びつけたのもよろしからう。

(410) **いたつらな目ハ喰物の外へ出る**

東魚＝喰物に目をやつてゐる時は、何の悪氣もないと云ふ處に、可笑味があるやうに考へられる。

塵山＝席上に食物が出ても、夫れには目をつけず、何か悪戯をしやうと、心匠みをするのであらう。

省二＝私もさう思ふ。膳の方は一寸見たきりで、なにか、たくらむで居る、いたづら者はよくある。

(411) **商賣を譽てハ辷る物もらい**

省二＝物賈ひがお世辭をいふのは當然として、「辷る」が判りにくい。辷べるの上に、言葉が略されて居るのか。口が辷べるのか。餘りお世辭を言ひ過ぎて。退出する事に、座を辷るなどと云ふと思ふ。

東魚＝慇懃に立ち去るのではないか。

塵山＝世辭を云ふつもりの物賈が、口を辷らして禁句を吐いたものだ。

(412) **葛西の雪をさく〳〵て見る**

東魚＝葛西だけに河豚汁などとはいかず、ざく〳〵汁でと云ふのではないかと思ふが、これも亦十分自信はない。

塵山＝農夫は雪見などと、洒落る餘暇が無い。

省二＝雜供々々汁とすると、農夫の場合にでもとれるが、農夫ではなく葛西へ雪見に出掛けた場合にもとれる。又サク〳〵雪をふむ音とすれば、葛西の雪などは、たゞ歩いてゐてみるとならうか。

(413) **ちから自慢も穀つふし也**

省二＝世間咄のうちに、此句通りの言葉は耳にする。力自慢の大男などは大食家である。「も」とある如く低腦では穀潰しに相違ない。然し私の如く非力も亦穀潰しではある。

東魚＝力自慢などする樣なのは、えて腦の方は二番手だから、この句も故ある事である。

塵山＝斯る男が、他家の食客になる。

(414) **献立もこゝらて聟ハ寢る時分**

東魚＝献立のこの品の出る頃は、新郎新婦は床盃の段取りになる頃、座敷はまだ〳〵のみ手合ひが、尻を上げやうともせぬ頃なので、酒飲みに適したものが、出る運びになつてゐると云ふのであらう。

塵山＝座敷に出る料理は、こゝらが終りであらう。されば新夫婦も就寢する時分だ、と云ふので、又後から出る肴を待つのではなからう。

省二＝献立は大分進むだ。もう聟は寢る時刻だ。お開キにといふので、塵山翁説に組みする。

(415) **さすか太夫のよい所を泣**

省二＝名人藝。『ほんに泣せて三味線かやむ』（武・六）

東魚＝遊女の太夫ではないのか。流石に太夫職、こゝといふ要の處で、嬉しうありんすとか、何とか涙をみせる場面ではないか。

塵山＝私は淨瑠璃の太夫と解する。

(416) **自剃のたらい歸る迄有**

東魚＝自分で剃つた時の金盥が、その儘外出して戻つても、元の所にある。何だ仕舞はずに出たわいと、自ら苦笑する心持ち。

塵山＝貸坐敷（妓樓にあらず）を借りて住む人であらう。

省二＝安全剃刀が使ひ放しの儘あるなどより、自剃の盥は趣きがあらう。

(417) **片足の裏を詠んたかむしろ**

省二＝簟は冷ツこくてよい。あぐらをかいて居る場合か。古俳句に『胡坐かく佛の爲か簟』（見龍）。――柳多留に竹席をよむだ句は記憶しない。比翼莫蓙はある。

東魚＝河原涼の床几から、片足を水に

入れて、その足の裏が白々と、ながめられると云ふやうな場合を想像してみた。

壓山＝私は胡坐をかいた態と思ふ。

(418) **朝白に養子の心咲て見せ**

省二＝養子なれば早起もせねばならぬ。朝顔が早朝咲くのは、恰も養子の心根を示す如しだ。（この朝顔を養子が栽培し樂しみにして居るのであれば一層妙。）

東魚＝前説の如くであらう。

壓山＝栽培者は誰でも宜い。

(419) **もらハれて行神のあてかい**

省二＝貰らはれてゆくのも、神様のおみはからひ。緣のもの。

東魚＝贅。

壓山＝無味乾燥の句である。

(420) **松風も骨の出來たる小六月**

省二＝小六月（好日和）とはいへ、最早初冬の蕭條たる風趣あり、風當りのどことなく寂しく強きを、骨が出來といへるならむ。

東魚＝骨の出來たとは、それらしくなつて來ると云ふ心持ちで、軈て木枯とならう強さを感じたのだ。

壓山＝小六月は日和が長閑なるに、強く吹く松風を配したのは、少し當を得ないやうである。

(421) **人毎に譽るハ夏の水車**

省二＝凉趣――つまらぬ作。

東魚＝いかにも平凡にすぎる。

壓山＝幼稚の句と云ふべきである。

(422) **夜討の跡て目へ乳をさす**

省二＝夜討の大騒ぎの跡で、眼にものがはいつたか、眼を損じたかで、乳をさして貰ふ。「目へ乳をさす引越の中」（武・初）

東魚＝事が夜討といふ丈けに、目へ乳をさすのが、馬鹿〳〵しく可笑味も誘はれるが、又作りすぎの樣にも考へられる。

壓山＝曾我の夜討に、小柴垣で眼を傷つけた武者が、乳をさすのであらう。

(423) **むかしの質ハ人間を置**

省二＝だから人質といふ。

東魚＝當り前の事だが、かう云ふと興を誘はれる。すばりとやつた句法が面白い爲であらう。

壓山＝人間の質物に繩は掛けぬが、苛酷の取扱を受けたらしい。

(424) **礫のやうなうけ狀か來る**

省二＝やりつぱなしな、然かも性急な請狀だらう。初編に「礫のやうな法の返答」があつた。同工異曲。

東魚＝唐突にまた別に手紙も添えず、請狀ボツキリだけと云ふ心持ちを、礫と云つたのであらう。

壓山＝請狀には返事が不必要だから礫を投げるやうなものである。

(425) **文か流れて仕廻ふ曲水**

省二＝流水でもよいのだが、「文」とあるから、曲水であつて趣きが十分だ。

東魚＝戀文でも捨てた場合か。別に曲水の宴を催してゐる時でなく、只夜の中の曲水に流れる文殼をみた場合なのだらう。

壓山＝「文」とはあれど、詩歌を書いたる懐紙であらう。

(426) **分別を外から助る硯箱**

省二＝手紙を認めて居る處へ、分別心を起さすべく側から助言。場合は色々想像し得る。

東魚＝娘の文に乳母の入智惠と云ふ場合か。

壓山＝借金の申譯の狀に、女房の助言とも聞取れる。

(427) **らうそく賣の遠い四阿**

省二＝離れた場所に建つて居るので。前編に『琵琶の聞人をもたぬ四阿』なども同樣。

東魚＝四阿などで、灯を呼ぶやうな折りは、餘りないであらうから、蠟燭賣には緣遠いであらう。

壓山＝異議無し。

(428) **旦方の目にとまる茶宇縞**

省二＝茶宇縞は、當初印度から舶來したが、我國でも織る事になり、德川時代には袴地として、大に賞用された。『お妾は茶宇の袴にうなされる』の茶宇袴は國家老を指す。用途が判る。『旦方のをり〳〵迷ふ大晉寺』の如く、旦方は檀家の事。葬儀に茶宇縞が目についたのである。

東魚＝茶宇縞など着用、流石に有福なりと目につくのであらうか。（かう説明すると、どうも味もなくなるやうであるが）。

壓山＝旦方は寺院の檀家のことで、茶宇縞は最上等の袴地であつて、昔の町人などは此袴を穿かなかつた。此句は會葬者中の武士の袴を咏んだものと思ふ。

(429) **泣子へ膳をすへて突袖**

省二＝突袖でもよからうが懐ろ手ですむ。『なびかぬしたく突袖て居』（武・六）などの場合が、突袖には最も適當だと思ふ。膳を据ゑて泣く子の樣をみて居るのである。

東魚＝待兼ねの膳を据ゑたのに、まだ泣きやまぬなら、乳母はもう存じませんよと、取濟まして突袖で、つんとしてみせる場面が想像される。

壓山＝泣子に膳を据ゑて、それを如何にするかと、畏まつて見てゐる態で、實に突袖をするのではあるまい。

吟行地調べ 奈良篇（一）

麻生路郎

（1）奈良

★昔の奈良の都の地が自然に發展し擴大されて今日の奈良市が出來上つたやうに思はれやうが、事實はそうでない。今の奈良は人口僅に六萬の觀光都市であつて、昔の奈良の東北部に出來た後世の市街であつて、東大寺や興福寺や春日神社の門前町が發達したのに過ぎないのである。

★世に奈良朝時代又は天平時代と言はれた紀元七一〇年から七八〇年迄の七代七十年間に亘る天皇は、今の西大寺と奈良市との間に都を營ませられたのであつて、この都のあつた土地を現在では都跡（みやこあと）村と呼んでゐるのである。

★昔の寧樂の都、即ち平城京は東西三十二町、南北三十六町で全體の形が四角に出來てゐた。町割も碁盤の目のやうに四角であつた。そして三十六町の南北を四町づゝ九つに劃つて、北から南へ一條から九條までの名稱をつけ、三十二町の東西も四町づゝ八つに劃つて、坊と呼び、中央から東の四坊を左京、西の四坊を右京と名づけ、中央から左右へ一坊、二坊、三坊、四坊と言つたそうである。

そして東は今の奈良驛省線の西一町餘の邊で、西は垂仁陵・唐招提寺・藥師寺などから、なほ西の丘陵に及んで、北は那羅山の麓に掛り、南は郡山町の北に達して居たのである。

そして此の都の北寄りの中央に大内裏「皇居」があつたので、其の諸殿堂の趾が今もあり〳〵と殘つてゐるのである。

此の都城建設は隨分と思ひ切つた大規模なもので、まだ茅葺屋根しか見たことのない當時の日本に、一里四方に亘つて支那流の瓦屋根を集め、丹塗青瓦極彩色の宮殿を建連ねたといふのであるから、いかに豪華版そのものであつたかが想像されやう。

★奈良は其の日歸りの旅にもいゝとこだが、滯在すれば、奈良のよさが一層ハッキリする。一木一草にも千餘年の風韻が感ぜられる。人情も濃やかで詩人にとつてはうれしい土地である。

奈良へ來て亡命に似し枕する　路郎

（2）奈良公園

★奈良の公園は市街の東方に位し、その面積は百五十九萬六千六百二十四坪であつて奈良市の大半を占めてゐる。廣々とした芝生と鬱蒼とした森林と、その間に點在する堂塔伽藍、神殿廟宇との調和は千年の歴史の香に滿ちて居り殊に多數の鹿が、よく人に馴れて、草上樹間に遊んでゐる趣は他に類を見ない所である。

轉びたい淺茅ケ原に鹿の糞　艸樂

杉一本殘して春日暮れる　孤蓬

（3）東大寺

★東大寺は大きさから云つても、氣魄から云つても日本一の大寺である。天平勝寶三年、人皇四十五代聖武天皇の御發願によつて鎭護國家の中心道場として御建立せられた巨刹である。

★形態が七間七面に縮小せられた現在の堂宇すら、なほ世界一の木造建築であることを誇り得るのであるが、それが創建せられた時には十一間七面の堂々たる偉容で、當時の先輩國であつた支那朝鮮をも驚かした大事業であつた。

★東大寺は南都七大寺の一で、大日本總國分寺であり、又華嚴宗の總本山である。

東大寺を詠んだ古川柳では

勅封に鼻うごめかす東大寺
名の高い香一箇寺を焚きこめる
切わつて見れば名香寺號也

（4）正倉院

★世界の寶庫である宮内省所管の正倉院の御物も元は此の寺の物であつた。國寶建造物二十棟餘、國寶が四十七筆、九十八點もある。

さう聞けば國寶らしい光りやう　路郎

國寶の一つちがへば道具店　同

國寶のとこで圓體けつまづき　同

正倉院あの森ですと指さゝれ　孤蓬

（5）二月堂

★二月堂は高さ五丈、東西十四間、南北十一間の大きな堂である。天平勝寶四年に、良辯僧正の高弟實忠和尚によつて創立されたものであるが、其の後燒失したので今の堂は寛文九年に再建したものである。

二月堂といふ名はお隣の三月堂、四月堂と同じやうに俗稱で

吟行に伴ふ料金

電車　大阪・大軌から片道四八錢

人力車　名所巡り大軌奈良驛ヨリ一圓十錢奈良驛ヨリ一圓三十錢

タクシー　市内一二〇〇米迄五十錢、三〇〇米以内十錢增、名所巡り四圓五十錢

バス　市内一區五錢

名所案内人　名所巡り七十錢、半日雇切一圓吾錢

拜觀料　帝室博物館十錢、大佛殿十錢、三月堂五十錢、春日神社寶物館十錢、萬葉植物園十錢、興福寺金堂十錢

鹿寄　一回十三圓（春日神鹿保護會）

旅館　公定宿泊料（夕・朝食付）（一流）五圓から八圓（二流）三圓から六圓

大和歴史館　十錢

あつて本名ではない。

これは「十一面悔過」といふ大修法が毎年二月に嚴修せられたので起つた名である。今では寺側でも確說はないが、創建時に十一面悔過所といふ修法場が東大寺にあつた。それが二月堂に當るので、當初の名稱はそれであつたといふ說がある。

★本尊は十一面觀世音菩薩、佛身僅に七寸といふことである。寺傳では創建者實忠和尙が難波の海から取上げ奉つた生身の觀音像といふことになつてゐる。それはこの小觀音の方であるが、別に一體の大觀音といふのがある。兩體共に絕對秘佛となつてゐて、參籠の僧も開扉することを許されず、實忠和尙一人以外に誰も知つてゐるものはないのである。靈驗のあらたかなことは世上廣く認めてゐるところで、平常でもお百度踏みが絕えない。

古川柳では

神社は春日佛閣は二月堂
十二月堂なら若狹から雪をよび
呼出して我顏を見る二月堂

といふのがある。(一)(二)はお水取にもじつた句である。

お百度も足取り早い二月堂
路郎

(6) お水取

★天平勝寶の昔に變らず、東大寺の二月堂では、三月一日から二七日の間(舊暦では二月)、君民の安泰を祈り、死者の冥福を修するため修二會(お水取行法のほんとの名)が嚴修され、十二日夜に至つてそのクライマックスに達し、比類のない古密教の神秘繪卷が展開される。

★この夜の修法は細殿の「七度の使に」始まり、十一人の練行衆が籠松明の火にシルエットを搖がしながら本堂に這入るられる。かくして荒々しい「走りの行」から更に「後夜の時」に移り、深更二時を過ぎるころに牛王杖をついた呪師を先頭に諸衆は童子の抱へる大松明と篝火のほのゆらぐ靑石段を下り、閼伽井屋(若狹井)に入つて、六荷の靈水を汲上げる。年中信者に授けられる「お香水」はこの水である。諸行法中で最も凄まじい達陀の妙法が行はれるのは、この後で、八天の役々は禮散亂する。火の子は異樣な達陀帽をいただいた八天を包んで焦熱地獄を思はされる。達陀とは火を意味する荒行で天人影向の儀式をうつした妙法式であるそうだ。

★七八年以前、この修二會を拜觀して、その壯觀に驚き、私の放送時間の半ばをこの話で消してしまつたことがあるほど凄絕を極めた行法である。この壯觀を見物する群衆は「おたい松」の火の子を火難避けの御守として爭つて拾うて歸るのである。

★この行で御香水を汲上げる閼伽井屋は燃えつきそうに柴を立て成功してゐるそうである。この閼伽井屋のことを世間では「若狹の井戸」と云つてゐる。なほこの水は修法創開の頃に遠く若狹の遠敷川から流れて來たといふ傳說があるので「若狹井」といふ名が起つたのである。井戸の東寄りに遠敷明神を祭つてあるのも此の由來に基くのである。

お水取りを詠んだ古川柳では、

呼井戸の天下一なり二月堂
若狹〳〵と呼びたいは空德利
若狹から墨の名所へ硯水

などがある。

(一)は年中、涸井戸であるが、お水取りの時に呼水をすると遠く若狹から水が來るので、天下一と云つたのである。

(二)は酒呑みだつたら、さしづめ空德利を振つて、若狹〳〵と呼びたいだらうと皮肉つたもの、(三)は、奈良は墨の名所であるところから斯く詠んだのである。

閼伽井屋は燃えつきそうに柴を立て
艸樂

(7) 良辨杉

★二月堂の下にある杉の大木は世に謂ふ良辨杉で、良辨僧正が嬰兒の時、鷲に攫はれて此の樹上に居たといふ傳說樹である。これは芝居にも仕組まれてゐて有名である。良辨杉を詠んだ句としては

尊智識普く諸經よく辨じ

などの狂句張りの駄句なら少しはあるが、紹介するほどの句は見當らぬ。今人の句では

良辨坊あの枝あたり度々見上げ
艸樂

位なものである。(つづく)

お百度を踏む二月堂

隨想

飯の上の蠅

小山文三

○

電髮の雀の巣のけばけはしいのを禁止する事になると、むやみに額の近所に渦卷をこしらへるし、首筋にくるんだ髮たぼに網を被せて頭の頂上から吊り下げたりす。

飯の上の蠅同樣こちらを追へば向ふへとまつて押へ切れない恨みがある。

○

金銀糸入りの着物が禁止されると間もなく國策型銘仙だのが流行り出したが、一部特免解禁になると忽ち金銀糸入りはものかは絹ビロードの贅澤なコートに毛皮の襟卷などが飛び出して來るのである。恰度蟹の眼の如く其一方の目を押へると、片つ方が飛び出して來るし、少し緩めると兩方共飛び出して來るのと似てゐるから嫌になる。

○

國民服が制定されると、其創定の精神を沒却してしまつて、型の異なつた國民服まがひの國防色が巷に散亂して時代の尖端を切つた樣な顏をしてゐるし、無暗に純毛や半毛の國防色の生地を漁り出す等、誠に人の手を燒かす事が多いのである。こんなのを時局に便乘した贅澤家と言ふのであらう。

○

節酒が勵行されるかと思うと料亭に飛び込んで土瓶の燗酒を湯呑みで無理にせがんだ事を自慢らしく吹聽するものもあるし、花街の自動車乘り入れ禁止となる?、こんどは馴染の宿屋へ乘りつけて一杯やる等の新手を考へ出すし、梯子で呑み廻つて、夜更けの郊外電車の中で管を卷いてゐる光榮が絶へぬのである。こんな處にも、人のやらぬ事を敢てやつて見たい、いたづら癖があるのを情無く思ふのである。

○

節米を奬勵すると、無暗に洋食屋が込むし二等車の棚の大トランクから白米が零れたりすると云ふ事であるし、近い處に田地を買つて飯米を確保せんと巧らんだりするらしい。之れがブルとインテリの邪道と言つて顰蹙される所以である。

○

體育奬勵となると、團服の體裁を整へて、要りもしない大きなルックサックを背負つた奴輩が列車を惱ませるし、汽車旅行にも辨當と水筒携帶の帶を奬勵してゐるのに、却つて滿員の食堂車の外に行列を造つて押し寄せて待機してゐる群衆を見るのである。これでは計畫が齟齬する許りでなく、奬勵の精神が理解されないで、徒らに見榮や、體裁を張る斗りである。

○

汽車の寢台券ブローカーを取締る爲めに新にむづかしい購入方式が制定されると暫くは無用の豫約申込が減つて來たが、今度は左程急用でも無さそうな、若い美しい或階級の婦人の寢台の旅が目立つて來たりする。

之れ等は或間隙を利する小才子が多い證據である。

遊樂の時間制限に對しては、ギリギリ一杯のスベリ込みと言ふ手を使ふ奴輩もあるらしい。尾崎咢堂先生にこんな歌がある。

酒を呑み煙草を吹かし　藝者あげ
高く　唄ふよ　非常時の歌

○

馬匹改良の目的に公許された競馬に大金の賭けられるのはまだ諒としても、取引所の各種定期取引が暇になると、兩國の大相撲に賭けたり、甲子園の野球

釦貝

★

岡田某人

生きてゆくために嘘をつくのか、嘘をつくために生きてゆくのか。

※

あゝ斯くて果つべきか。——男子三十歳を越えると誰しもそんな事を考へるものらしい。そして……。そして斯くて果てゝしまふのである。

※

空の美しさに氣がつき出したころから、もう人類は不幸であつたに違ひない。

※

何とか奉公日。飲食店が一せいに休業しました。呉服店やデパートはいつもの通り。

※

玉葱。オイコラ片肌ぬぎなんぞになつちやあいかん。

鯨。果して臍があるのかないのか。

かれひ。しいつ。

河豚。よう云はんわ。

水菜。素足だわ

栗。背伸びつてどうしてするもんだつたつけ。

柿。他人の云ふことなんかきいてをれるもんか。

いちゞく。だつてえ——。

花花生供造装
環籠花花飾
フロリスト
紅
くれない
大阪市西區京町堀通り三丁目
電話土佐堀五一三〇番

に賭けて力んでゐるなどある。これで相撲や野球に人氣があるのだとしたら誠に心細い限りである。

○

切符制になると砂糖屋の小僧さんが無愛想になるし、燐寸の質が低下するし、煙る炭、燃へぬ石炭などを、平氣で而も恩に被せて持つて來たりする。これにつけて次の歌を思ひ出す。

横柄の彼の態度は　憎かりき我前に立ちて何か言ふ時

○

學生は込み合ふ乘物には起つと云ふ申合せが出來ても、一ヶ月も經たぬ内に早や健忘性に罹つてゐるらしいし、理工科の要求される時世に、文科志願者が激增したりする。

小さかしき人のみ　日日にはびこりて　大愚に似たる人更になし　讀人不知

○

いくら交通整理の巡査が聲を嗄らしても追つつかないので、最も交通の頻繁な、主要な街路に、繩を張つたり、柵を設けて事故防止を試みても、これさへ壓し潰す許りになるので、とう〳〵鐵鎖が巷のあちこちに張り廻されて、忠實な歩行者が飛んでもない遠廻りをせねばならぬ憂目を見てゐるのである。

薤の皮と人の心はいくら剝いても〳〵も中味が同じであるらしい。

○

公定價格が定められると、それが最低價格であるかの樣に觸れ廻るものがあるし、忽ち引上げの陳情團が結成されるし、甚だしいのは賣り惜しみや、闇取引をやるし、おとなしい連中は、如才なく品質を下げたりして、彼の手此手と、嫌が上への猿智慧斗りが溢れたりする。

これを嘆じて或人の讀んだ歌がある。

もの總て　闇取引となりにけり　人の心も斯くあるかと思ふ

○

ス・フを使へと言へば純綿を漁るし、無用の旅を遠慮させると、敬神だの、體育だのに名を借りて團體遊覽に出掛けるし、派手な柄を自肅させると、無暗に裏地に金を掛けて濃好みになるし、代用食を奬勵すると、忽ち小豆や大豆や馬鈴薯までも買溜めするし、組合組織が出來上ると往々對立的な相克摩擦の種を蒔くらしい。

小さい藥罐は直ぐに熱するけれども、又直ぐにさめて終ふと言ふ諺が思ひ出される。

昭一六―二―一一稿

パインアップル。ひどい目に逢ふものだ。寒い寒い。早く石炭をくべてくれ。

白菜。讃美歌が好きですの。

※

汚いものを美しくするために悲劇といふ言葉がある。だが汚いものはやつぱり汚いさ。

※

借金しなかつた、といふことは百なら百の暮しよりしなかつたといふこと。死後莫大な負債があるといふことは、その負債額だけ、割前以上生活した樣な氣がするではないか。

※

割れないガラス。――魅力なし。

※

芝居や映畫で使ふ盃の形。あれはいゝ。大型で、すつと美しく開いて、……あれなら身を持ち崩せさうである。

※

喜劇といふ言葉は觀衆をおだて上げる手である。それがうそだと思ふなら、どんなものにでもこの言葉をくつつけてみるがいゝ。必ずとほるから。

※

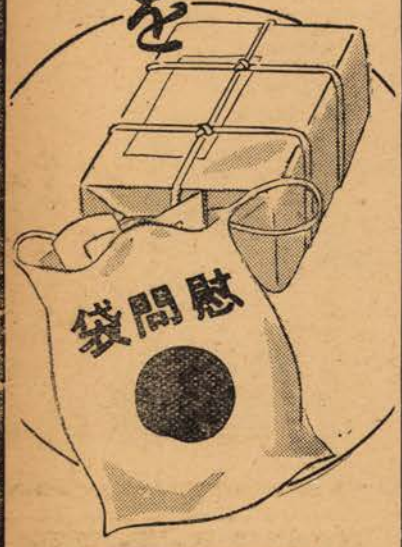
道德とは、女子供のためのものらしい。（勿論既存の意味の道德である）

道德的な男――何とまあ馬鹿らしいものか。

※

一切を敵にしてもいゝ、といふ氣になる日がある。その日程彼が立派である日はない。おしむらくは永續きがしない。

（つゞく）

戰線の將士へ
臼衣の勇士へ
慰問品を


慰問品賣場　一階
實用百貨店
松坂屋
大阪・日本橋

近作柳樽

麻生路郎選

妹を叱り舊惡ばらされる　神戸　卑上一扇　同
遠慮なく言へに言つたで叱られる　同
教科書に未だ殘つてるボーランド　同
夜行軍あかんあかんがついてくる　同
常會の云ひ足りめ分家で云ひ　同
ぽつちやんへ坐り直さぬお氣に入り　同
出產へ米を背負つて母のくる　同
產んでやつたよと鷄さわぎたて　岡山　岡眞理子
嵩悠々煙の先きへ先きへたち　同
この頃の淋しさ寫眞うつして見　同

カーネーション一本十五錢

カーネーション默つて値段見て歸り　同
どこで息つぐのか母のお念佛　同
春陽うらゝ給仕はさみをさがして居　同

課長食事

パン二つ足るのかしらと見て通り　同
象牙箸銀婚式の艶になり　登別　横山勝二
入浴の背をふかせて名取なり　同
小ぽけな慾へ二十坪が建ち　同

臺灣雜詠(三句)

臺灣の冬どてらで居浴衣で居　同
安物の蚊帳一月へ低く釣り　同
しやがんでる十六ミリへ塔車來る　同
三部經又みあかしのゆらぎかけ　廣島　大山露斗
大切に大切にするじゆんぬん　同
神曰くお前の心からなをせ　同
ぐちを云ひ〳〵八十に手が屈き　同
翼養をたゞ丸のみにして稼ぎ　同
みかんむぐ二人の外にたれもゐず　同
はだかでもよければと云ゑ御ゑんだん　同
制服のブローチだけが若く燃え　岡山　本田ユリエ
廢物利用似合はぬハーフコート着る　同
若竹の素直さに似てのびたまひ　同
漢文へ「だつて女學校でしたもの」　同
さわやかな音たてゝりんごたべ終り　同
語尾を落して電話で約束し　同
復習の子へ讀經の長すぎる　伊丹　酒井美知夫
男親子の文數を忘れがち　同
里の義父むこの禁酒がもの足らず　同
寢つく子へ日蓮宗はたゝくなり　同
酒賣らぬ酒屋電話が鳴りつゞけ　松江　梅本登美也
學歴を女に問はれぼかしとき　同
札束よ汝は僕に親しまず　同
丸刈は歸還以來の姿なり　同
箸二本兒の指先も愉まれ　東京　山田宙望
救急車はたして春の罪なるや　同
春の陽に帽子の穴も苦にならず　同
徹底に文化を離れたき心　同
亂れる心を筆の先に知る　岡山　生子洋子
人の所作だまつて見てる物憂い日　同
とび出せる霰にも似し言の葉よ　同
躾糸とつてくれつゝ柄を賞め　同
勇退とは體裁のよい言葉だね　大阪　富岡亘人
同じ桐でもタンスと下駄に　同
子と酒がなけりや働き甲斐もなし　同
新一錢賽錢箱へ屆かない　同

友、滿洲より來る(二句)

體格をほめて短いドテラ着せ　朝鮮　高原懸源太
月給を服とオーバで想像し　同

滿洲雜記(二)

湯淺小城子

滿洲に住む日本人はよくニーヤと言ふ言葉を使ふ。例へば「おいニーヤ上新京驛去罷。」の如く。處が滿人にして見ると你—オ前—といはれるのなら當然だが、ニーヤと殊更にやられると非常に侮蔑された意味にとれて、口に出しては言はないけれ共腹の中では大變反感を抱くのである。

こうなつて來ると、日常使つて居る言葉だけに民族協和の精神が浸され、面白くない結果をもたらすので、昨今識者の間では極力此の言葉を使はない樣にしようと云ふ立前から新しく滿洲に赴任して來たやうな人には、機會ある毎に注意を與へて居る狀態である。

處が私が昨年內地に歸る時の事、釜山行急行「のぞみ號」が巳に朝鮮に入つて平壤を過ぎ京城に來ても、驛で辨當を買ひ土產物を買ふ度に賣子の朝鮮人をつかまへて「ニーヤニーヤ」とやつてゐる中年婦人が有つた。此人が

一、朝鮮は日本であると云ふ事を知らないのか

一、或ひはニーヤと云ふ言葉

★★★ ★★★

知事の古手に遊泳術を聞く夜寒　同
寄附すればとたんにお茶を出してくれ　同

甥の紐落し記念寫眞を見て

靖國の父に見せたい晴姿　尼崎　小林文月
學生と思へぬ程に世辭に馴れ　同
母よりも五センチ高い女學生　同
紹介所眼で示されし堅い椅子　同
家の裏見せて下さいには因り　ハワイ　長谷川猿吉
濁つた眼よく動かして嘘を言ふ　同
男より取る金男にまた取られ　同
臨終へ集まる子等は出世して　大阪　山川富士
終發にのれて女は胸を撫で　同
ねんねこが窓を塞いだ三等局　朝鮮平北　小林ヒデヲ
頑張れと唯一言を汽車の窓　同
創氏改名オハヨーだけは云へ　同
母からの足袋三寒の朝につき　同
持駒は勝つてる方が先に見せ　東京　田中青風
タイプ科へゆく斷髪がよく似合ひ　同
お蔭様でと軍需關係なり　同
忍耐の要つた言葉と知るだろか　大阪　橋本美奈子
木炭車夕餉の支度の様に燃え　同
一人言シマッタ猫がきいてゐた　同
白衣の士キャッチボールを撮られたり　松山　友田雨眠
男四十墨の摺りよを叱られて　同
清貧の彼れ漬物の味をほめ　同
夜業から戻り教科書買つてくる　尼崎　奥田緣翠
隣組氣易く巡査やつてくる　同
となりぐみこんなものをわけてくれ　同
彼の人に髭があつたなたかつたか　大阪　有馬千斗
女ほど泣けば男も紛れやう　同
十圓で片づけますと公益社　同
雜談を上手に混ぜた稼ぎぶり　大阪　堀毛一龜
多すぎた希望春から捗らず　同

一坪の野菜畑から夜があける　同
血壓の話或日の社長室　和歌山　秋月宏方
一億の中にはこんな馬鹿も居り　同
統制下派手な商賣もう出來ず　同
丸刈の頭五本の指で搔き　大阪　平川久枝
孝に入る道は二人の別れ道　同

妹教員となる

朝晩は妹らしい聲を出し　同
百姓の次男が家を繼いでゐる　姫路　岩崎水虹
滿員の汽車が消えゆく春霞　同
竹馬の兵姑娘を喜ばせ　同
運のよさ時計の中の小銃彈　堺　村上角堂
同名の戰死で記者にをどかされ　同
上海行一旗組も二三人　同
約束をたがへる人と知りながら　松江　松崎專太郎
妥協する氣と氣と火鉢中にして　同
撮られるに馴れるぬくぼがにくらしい　同
廻覽板渡すところで鼻緒切れ　京都　野口柳太
これは〳〵一升下げて友來る　同
豪華版ですよの辨當玉子燒　同　今西鼓愁
マスク掛ければまばたきひとつせず　大阪
中折の形くづして土工くる　同
體位向上皆んなそろつてのつぽです　同
近よれば模型であつたあほらしさ　愛媛縣大洲町　米澤曉明
クレオン畫屋根には雪が降つてゐず　同
片言の巻がある子の遊び　同

平沼內相車中談(一句)

新體制曇れる玉を磨くこと　大津　鈴木石鹿
相性はどうでもいゝと末亡人　同
貧しさは一茶啄木揃へてる　同
統制もいゝが米やの官僚化　朝鮮　村野東狂子
大陸の廣き觀察者呑み込めず　同

が非常に悪い滿語であると云ふ事を知らないのか

一、又は日常滿洲で口にして居るのがつい出たのか

以上三つの何れの場合であるかを知らないが、兎に角不注意も甚だしいと言はねばならぬ。

ニーヤと朝鮮てやる人も有り

○

或る日事務を執つて居ると、知人の日系警察官が訪ねて來て、通譯を一名貸してほしいと云ふ。丁度其の日の午後から或會議が開かれるのに、警察の通譯が病氣で休んで居て困つてゐるから、との事なので、早速一名を選んで氏に同行させた、處が此通譯が夕方歸つて來て「どうも今日の通譯には、困つてしまひました」と云ふ。

どうしてかと尋ねると、「會議に集つた人の內に非常に訛のある日本語を使ふ人が居て、どうしても意味が判らず、どうにかこうにか前後の文句を考へ合せて、話の筋はたてゝおいたが、あんなに困つた事はない。」との答へである。

考へて見ると其人と云ふのは、東北地方の人で、徹底したずうずう辨なので、我々日系も折には、意味がはつきりせずに困らされるくらいであるから、之は無理もないと思つた。

純綿を恩に着て着る肌襦袢　同
我一人佇んでゐた初日の出　特務艦朝日　坂本遠見路
探照燈故郷の空を照らしてる　同
燈臺へカメラの欲しい雲が湧き　同
因習はもとのまんまの隣組　大牟田　高田抱逸
なり上り今日此頃は髯をたて　同
妻だけに縫紋でしたと見逃さず　上村十四之
生活苦ハツキリついた衿の垢　同

過去の參戰を回顧して

彈の來る方へ御神符入れかへる　布施　上田翠峰
公定値ですと店員世辭もなし　同
三圓の財布の底に電車賃　大　中西彌生
山と山重なり合うて雨になり　同
日記の中の傷だらけの僕　大阪　星伽龍路
十圓の行方を母は知つてゐる　同
七七令母の氣苦勞少し去り　岐阜　藤井八路
行き過ぎた女に淋しい日本髪　同
看護婦が天職であり稼きおくれ　名古屋　松井靜子
沈默の何時か分つて戴く氣　同
何處でそれだけ呑ますかと妻の糾明　大阪　公木示右
闇取引は駄目と晩酌追加せず　同
二食して晝は煙草をふかすのみ　同
春なれや中修工が渡りゆく　大阪　石田冰天
素人工我世であつた日を思ひ　同
お互ひにスパイの樣な顏に成り　同
低い鼻女の心せまくする　大阪　和久双葉
素人工ベルトの恐い廻りやう　同
看護婦は醫局の裏も知つて居り　大阪　佐野牛歩
嫁が來て母の知らない物が增え　同
須磨の夢明石の夢が建ちならび　姫路　小川靜觀堂
久濶へ娘二十に成りました　同
軍屬で征ける次男が羨やまれ　大阪　山本葉光

佛滅も大安もなし征く日なり　同
開拓へ少年らしい熱意みせ　廣島縣竹原町　杉原愛鳩
上役の不平眞向から浴びる　同
肩書も捨てゝ今日から隣組　大阪　青野花笑
十八九娘の仕科(シゲサ)も母に似る　同
鳩時計有福さうな室で鳴り　布施　岩本晴美
蔭膳の寫眞へ見せる二重丸　同
表彰狀ずらり並んで失業者　堺　野島神樂
體力章黃銅色に盛りあがる　同
父ちやんの髭を見たかろ大寫し　南支　米谷松太樓
前線も銃後の勞苦見逃さず　同

米配給强化

混食も湯氣の盛んに立つられし　朝鮮　松由幸士
愛民と書初めだけはする面長　同
禮節を曲げよと言はず句に復れ　松山　眞田祿重郎
別莊番淋しからうがかるまいが　同
久しぶり逢へば統制から聞かれ　島根　田中弘樓
俸給袋今日から妻の手で開き　同
自活とは字の美しさばかりなり　廣島　福原魔美
影ぼしでみつかつているかくれんぼ　同
新體制メモ一枚も無駄にせず　新潟州　高木滿山
遙拜に支那の子もゐる宣撫班　同

芳泉兄長男獲得

大寒を衝く產聲も男の子　廣島縣竹原町　西野みづほ
青物屋土も目方の中で賣り　同
隣組規則は規則らちが明(アカ)き　室津港　木村染史
魚市場損した顏で秤持ち　同
ミルクトースト女中の夢もこの生活(クラシ)　京都　馬場理公
戀に破れて翼贅に生きんとす　同
御冗談計りおつしやる雨の宿　惠山鎭　米倉右情
一合の酒を卵の何の彼の　同
酒探す子の孝心を知らざるや　大阪　戸奈已之介

通譯も東北辯へ匙を投げ
通譯の苦しさ日系だけが知り

其の結果折角の名論卓說も、或ひは、

通譯は三分の一五分間

位で簡單に片付けられた事だらう。

○

私の勸めて居た役所に斯んな話が、傳へられてゐる。四五年前の事であるが、轉勤して來たAと云ふ人、口やかましいので、大分滿系に煙たがられてゐた。處が此A氏が或る日の事、「自分は肥つてゐる」と云ふ意味の滿語を、敎へて呉れと頼んだら、「自分は馬鹿です」と云ふ滿語を、敎へてやつたそうでA氏は爾來しばらくの間と云ふものは、人と話等する時、屢々「自分は馬鹿で苦しいです」と云つてゐた由……因に此頃は夏であつたとか。

惡口を言はれてゐても滿洲語

○

滿洲國彩票條例（大同元年九月二十二日公布實施）に依ると「政府ハ其益金ヲ以テ災害救濟費若クハ社會事業費ニ充當シ又ハ災害救濟基金ヲ造成スル爲彩票ヲ發行スル事ヲ得…第一條」とあつて彩票は右の目的で、發行されてゐる。而して此の國に住む殆どの人は、此目的を知

結婚を急いで欲しい世とはなり　愛媛縣　木村棟友
すねる事覺えて末が恐ろしい　同
實績のあるだけ呑んだ櫻色　同
子と妻を相手に安い氣焰あげ　大連　松井數寄柳
式ちかく世帶道具に趣味を持ち　同
君や亡しおどけた顏のちらつきて　德島縣鳴島町　矢田壽澄
なむあみだぶつ稽古した聲せめ口調　同
陽だまりへ背中任かせて縫いつゞけ　岐阜　市川童顏
まだ無駄を母だけ知つて居る新居　同
銅壺チト便利で禁酒が無駄になり　大阪　村治榮津
ニキビ又一つふえてる十八、九　同

中野實氏の香港を讀む

法律に勝る威力を金が持ち　神戸　湯淺小城子
四十九日叔父貸金の事にふれ　廣島縣竹原町　梶川芳郎
モウ丘は春をさゝやく草の色　島根縣吉田町　伊藤秀坊

長女三つ誕生に際し

着飾つた晴衣へ子供の小さ過ぎ　新京　中村對州坊
里の子が今日も萬歳する列車　名古屋　八幡勿來
洗面に指先だけで寒の水　伊丹　岩井泉
水引のやりば看護婦フト想ふ　高松　福宮白鷗
淋しさはどうにもならず二十一　大阪　姫宮鏡子
戰陣訓傷の痛みを忘れさせ　大阪　武部香林坊
女事務桃割結うて退めに來る　大阪　藤森小雅子
北風に寂しくゆれし蜘蛛の糸　大阪　木下誠治
守札讀めない文字が一つあり　敦賀　岩井迷路

薄倖なりし妹に寄す

嫁さんだ〳〵嫁ぐ心も知らないで　大阪　南要兒
土曜日の夕燒空のたのしさよ　大阪　大西洋
買物へ帶を直して出るも妻　岡山　津田耕水
姑娘の顏晴れやかな初日の出　北支　益尾正高
賽錢の手にふと見つけた滿洲貨　長野縣上山町　佐二木千隈
ワンタンの笛の音なつかし支那の夜　大阪　古川鶴聲
らくばくの身へ人情を強く知る　大阪　永田六龍子

川柳雜誌に小川靜觀堂氏の凱旋を知る

隊長凱旋白衣勇士の眼がうるむ　蒙疆　宇敷桃水
裏庭へ廻りや下駄まで世帶染み　尼崎　山田南濃路

如露を搜す

古川風竹

昨年の秋、ホノルルにハウス三越といふ東京三越系のデパートが生れた。ある日、一浪と三越の三階、美術品部を觀る。寶曆頃かと思はれる江戸市井の風俗を描いた二つ折の屏風が目を惹いた。現代畫家の筆である。

神田明神の山車が市中を練つてゐる。町家の裏庭で男が植木いぢりをしてゐる。壁には桶や如露などが掛けてある。如露はブリキかトタン製とみえ銀色に塗つてある。「德川時代に如露があつたのかね？」と一浪、「しかもブリキ製の如露が……」と風竹。「ブリキやトタンは明治のものだから、この如露は銀製かも知れぬ」と二人は笑つた。が、それきりで濟まされぬ二人の探究癖。凡ゆる百科物を引いてみたが滿足な解答を與へてくれぬ。遂に上野の帝國圖書館へ左の條々を書いてお伺ひを立てた。

（一）如露は日本古來のものか、外國渡りか
（二）舶來物なら何年頃日本へ來たか
（三）德川中世頃に使用した如露は如何なる金屬で作られたか
（四）如露は日本の造語か、支那か、

上野圖書館からは十二月七日付で左の回答が來た。

如露ニ關スル件

御照會ニ係ル首題ノ件、其後種々調査致シタルモ適當ナル文獻發見不致、百科辭典、園藝書、農業機械書ニモソノ歷史的記事無之、外來語辭典、支那語辭典ニモ不見、イヅレ日本ノ造語ナラント推察スルモ的確ナル資料無之タメ一應以上報告致候

上野圖書館でさへ如露の身元原籍が判らぬとなると取付く島もない。しかし凡ゆる方面の智識人を讀者に持つ川柳雜誌の餘白を拜借すれば案外に如露の身元が判明するかも知れぬ。記して吉報を待つ。

るも知らぬも、彩票と云ふものに、非常な關心を持つてゐる。金壹圓也で購入したのが一萬圓に當る、と云ふのだから大したものです。然も二等以下之に準じて、人氣を呼ぶに足る十分なる方法を、構じてゐる。加之毎月一回賣出し翌月抽籤と云ふのであるから、毎月今度は、今度こそはと抽籤の日を待つ心と云ふものは、恰も樂しい夢を見る樣なもの、萬一當らずとも一枚一圓の損で、若し當つたとなつたら、一躍一萬圓、三千圓等々だから、興味をひくのも、無理からぬ事と云へよう。

康德七年度（昭和十五年）から、五圓の彩票がデビューした。之は頭彩五萬圓と云ふから我國の報國債券もいさゝか顏負けの形!!尤も報國債券は、日本國民赤誠の現れとして、購入されるのであるから、此點比較も出來ませんが――さうして一圓で買つた彩票を五人以内の人が、一片乃至は數片に、分割する事も出來る。斯うすると當籤した額が、持分に應じて、頭割されるのである。此の方法は、比較的貧しい農民や、苦力達に專ら喜ばれてゐる。

彩票は夢を見るもの飽もせず

月評 川柳一ト筋

路郎・鮎美・某人
鋭々・紫香・亞鈍

路郎＝さあ、始めやう。けふは「川柳塔」の句で……。

某人＝そうですねエ―間―ではホノルルの

某人提出＝川柳塔

風車幼き色をとり合せ

藤井友郎

の句など好きな句ですな。どうしても、あくどくなり易い川柳の中に非常にすらつとした氣持を捻らずに、その儘さし出したといふ感じで句全體からも風車の、所謂幼き色を感じて自分らの子供の時の懷しさを感ずる句だと思ひます。恐らくこの句は批評とか何とかいふものゝ對象にはならないけど、氣分の柔かい美しい句として推奬出來る。

鮎美＝私もこの句にチェックしてゐまして、今言はれたので童心のふくよかさを思はせ、そして赤、青、黄、の原色の判然りした、不純物を退けたところに、この句の妙味があり、そして風車といへば誰しも動的作用を思はすものですが、この句の下五の「とり合せ」としたところに説明の要らない良さがあるやうに思はれてなりません。

某人＝差し翳した風車の向ふにある青空が見えるやうな氣がしますね。難のない美しい句として恐らく盡きてゐるのぢやないか。批評の對象としては單彩すぎる。――そうですネ、鮎美さん！。

鮎美＝さうですね。説明しては不可い句ですな。

路郎＝僕は一寸問題を提出したい。――吾々がこの句を詠んだ時には某人君が最初に言はれたやうな情緒的な句として非常に心よく子供時代の昔に甦らして呉れたが、――單に風車といふものに就て一考すると、上述のやうな昔の子供の玩具（オモチャ）としての風車と、それからもう一つはオランダの繪畫などに見る風車とがある。ハワイでも農業といふものが行はれてゐて、所謂、田圃で板を組み合したペンキ塗りの風車があるとするなら、それを想像できぬこともない。さうするとたゞ風車といつた丈けで二つの違つた風車が吾々の頭に浮んでこないか。――吾々には第一の場合の玩具の風車が對象になつてくるが若し第二の場合の風車だとすれば、多少受け入れるものが違つて來はしないかと思ふネ。しかし第二として解釋しても、カラリと晴れた空の景色などが浮んでくるし、その板が――もし四角い板が――いろ〳〵の原色でとり合してゐるとしたら、一種の情緒が感じられると思ふがこの場合、どちらに諸君が採つてゐるか聽いてみたい。

某人＝それは、玩具ですね。

路郎＝幼き色をとり合せ、と言つてゐるところをみると玩具が勝つてるネ。

某人＝そうです。農業に使つてゐる風車だともつと激しいものが……

路郎＝日本にも農業などで用ひてゐるが、それは單純な色でハワイの實情を知らない僕には、さういつた疑問を投げてみるのもどうか、と思つたまでだが――。

某人＝そら、一遍行つてこられんといけませんね。（笑聲）

路郎＝この作家はホノルルの町に住んでゐる人だから十中の八、九は第一の風車だと私も思つてゐるが。――長谷川猿吉君なんか住んでゐるところは農業地だがネ。外國でも原色に近いものがあるかも知れんね。こゝらのガソリン・スタンドに使つてゐる色の取合はせは、アレはアメリカ式の配色だね。

某人＝僕は同じ原色だとしても、淡彩なんですネ。原色に近いことは近いんだが、あの桃色みたいに非常に薄められた感じですナ。

鮎美＝昔、私らはよく見ましたが、この頃、一寸あゝいつた風車が見當りませんネ。

某人＝（膝かさず）それは止める豆が少いから。（笑聲）

鮎美＝ははは、しかしそれだけに懷しいですね。

路郎＝ちかごろ、赤ン坊の眼をよろこばせる風車は皆セルロイドだネ。それにデコレーションが多くて、あの懷しさはないネ。

某人＝セルロイドだと壞れたら、慘酷の感じですが、以前のだと、非常に儚なく脆いものがあつて、それが好きだ。

鋭々＝向ふでも、やつぱりあるかも知れませんね。

鋭々提出＝川柳塔

雪つもりもう惡人の影もなし

麻生アート

鋭々＝アートさんの句、哲學者のやうな句で、白銀一色に美も醜もなく、たゞ清淨な雪だけが眼に映るのみで他に何の雜念も湧き起らない世界を示してくれてゐるやうに思ひます。雪が降つた光景をみれば勿論誰もが美を感じるであらうが、この「惡人の影もなし」と言ひ切つたところに趣きを自分は認めてゐる次第で、この着想を非凡だと思ひます。

鮎美＝この句の「惡人」と強く表現してゐるところに川柳の醍醐味があり、そして雪と戰うにんげん（註・特に人間を平假名にして呉れたのに記者に注意あり）、大自然の美、さうしたものを深刻に思はせる句であつて、ごく、なだらかな表現によつてこの句は價値づけられてゐると思ひます。

亞鈍＝一寸言はして貰ひます（筆記し乍ら）今鋭々氏が提出されたアート君の句とその説明に僕、少し得心しかねるやうな氣持でゐたんですが、鮎美さんの仰言つた、あの川柳の醐醍味―

某人＝醍醐味だよ。

亞鈍＝あゝそう、醍醐味ですね。それで、はつきりしたんだが某人！　どう思ふ。

某人＝はつきりしたつて、どういふ風に。

亞鈍＝つまりやねえ。あの醍醐味といつた境地は少し僕には判りかねるんだが、あの川柳で使ひ、或ひは川柳故に許されてゐる何と言つて可いか大袈裟な表現とか、物言ひ、此悪人とビシヤつと出したのネ。どうも僕にはいけないんだ。――といふ事がはつきりしたんだネ。

某人＝ア、成る程。句が判つたといふ意味ぢやなしにね、自分が納得したといふ事が判つたんだネ。

亞鈍＝句は解つてゐるんだがつまり僕の得心できないところがはつきりしたんだ。

鋭々＝つまり、川柳の價値があるか無いかが判つたといふ意味ですか？

亞鈍＝……（仕しく筆記す）

路郎＝川柳の價値が有るか無いかといふより、表現上、雪に突如悪人をもつて來たといふ點に納得しなかつたのと違ふのかい？

亞鈍＝……

路郎＝しかも、それが川柳に許された表現であり、それに川柳の哲味を感じたといふ事に納得が出來なかつたのと違うのかネ。

亞鈍＝（筆記を某人に攜き）大體、まあ先生の仰言つた意味で納得出來ないんですが、然し、コレ哲學的だとか、哲味だとかいつたものが此句から考へられやうとは思へないんですがね。この「悪人の影もなし」といふことが、結局雪の清淨さを言つてることなんでせう。それにしても――

路郎＝清淨さを言つてゐるといふよりは、對立的に言つてるんだね。

亞鈍＝それなれば、對立的に言ふのに、悪人と持つてきたのが表現上、餘りに川柳的であつて、それは普通の場合の――つまり川柳でない文學上の場合の――表現としては感心できないのぢやないかと思ふんですがなア。でこの場合、それは川柳では斯ういつた比較とか、對立とかは許されるものだとするなら、私は一言の文句もありません。

路郎＝川柳は詩とか文章のやうに長いものでなく、十七音字の限られたものだから、極端な言葉を對立せしめる場合もあるわけだネ。

亞鈍＝極端な言葉の對立といふ事は、修辭上、詩でも文章でもそれはある譯ですが、例へば悪人なら悪人といふ大きな言葉から芯といふか、種といふか、そういふものがつまみ出し得るなら、その句なり文章でも成功してるんですが、さうでなく、どかんと大きな言葉を出しても、芯が無ければ安つぽい脅かしでしかありません。（某人より筆記を續く）

鋭々＝これは、つまり雪が積つたといふ、雪の雪景色をみた場合、塵やゴモクの上に積つても美しく見えた。その場合に常に哲學的思想といふか、心理狀態といふか、この雪の清淨さを其處に特に再認識をした場合に、悪人なんて現實にそこに隱れたものでなく、たゞ自分の感情を述べたまでゞあつて、どうしても今の對立感といふものが、そこに表れて出來た作句と思はれる。――そして見わたすところ醜悪といふものが何一つ見えないといふところに、この雪の淨らかな喜びを胸に懷いたといふ句ではないでせうか。

鮎美＝いまの鋭々さんの自分の胸のうちに懷いたといふお言葉は私も同感です。

亞鈍＝さういつた句意は僕も判るんですけれど……。

鋭々＝結局、突然に「悪人」が表はされたといふのが納得いかんと言ふんでせう。

亞鈍＝けつきよく、そうかな。

某人＝僕をして言はしむれば、悪人といふ言葉の使ひ方が不可い。

亞鈍＝さう。さういふ事になる。

某人＝作者は、さつき、鮎美氏の言はれた川柳的字句として用ひてるんだけれど、その川柳的な含みといふものに賴りすぎてゐる傾向がある。そしてこの悪人なるものが、何を象徴してゐやうとしてゐるのか、實に曖昧なんだ。それで對立とか、例の雪によつて一色に淨められるとか、そういふ事を作者が考へてゐたならば、この句は非常に古い句だと言はれても仕方があるまい。成程。表現は新しいやうに見られるけれど、句の内容、作者の意識の點に立ち入つてみると、古い。

亞鈍＝さう。古いね。

某人＝だから僕はアート君のために、もつと他の深いものがあるんぢやないかと、さつきから考へてゐたんだけれど是を投げた。（笑聲）――その投げさせるもう一つの原因は出の上五の「雪つもり」といふ言ひ方があまりに稚拙で、しかもそれがその儘に、うつちやられてゐる氣味があつて、そんな印象からこの句そのものが燃燒の中途で固まつてしまつたと僕はさういふ風にとつてゐる。

亞鈍＝溶けて流れねばならない雪達磨を出す代りに、悪人で固まつてるんだヨ。（笑聲）

某人＝悪人。ひつかゝつたかな。――兎に角、言葉にひつかゝり易いといふのは吾々、お互ひ充分注意す可きですナ。

路郎＝大體、あの若さでは、悪人だとか、善人だとかを云々する資格がないのに、それを擔ぎ出したから、さつき言はれた固まつたやうな句になつたんぢやないかね。もう少し人生に觸れてからなら兎に角、今のところ悪人といふ文字を使つた川柳など作らない方が無難だ。

亞鈍＝そ、それです。この句に悪人といふ言葉の芯がないのは。性善說とか、性悪說とか、人間は生れながらに善人だとか、悪人だとか唱へて人類に號令するのは支那のずつと昔、豪い〳〵何とかいふ大哲學者みたいになつてからの話だ。ぼく、これでもや〳〵した最前からの不滿が、綺麗さつぱりしました。

某人＝アート君の句では一番最後の句――

紀元前幾年からの海水か

そも

が佳いね。調子も高いし、それでゐて、ヒネたところがな

い。結局どんな句を作つても、反撥される句は作者自身の中に、それ丈の禍ひがあるんだしするから、妙に捻ねくらないで素直になるのが第一番ですネ。

路郎＝素直な句を作るといふのは却々六ケしいことで、たいていは胸倉を捉まへてくるやうな句が多いね。（笑聲）

鮎美＝さうですネエ。

路郎提出＝川柳塔

病人に訊けば一圓借がある

り　魚住滿潮

これ何でもないやうな事を言つてゐる句であるが繰り返して讀んでゐると、これで病人の純情といふか、小心翼々といふか、永患ひをしてゐて、やがて死ぬんぢやないかといふ事を考へると、その一圓の借といふものが大きな問題になつて表れてくる。さういつた病人の心理狀態がうまく捉へられてゐて、面白い句だと思ふ。

某人＝いまの先生のやうな解釋のしやうも成程、ありますけれど僕は斯ういふ風にとるんです。誰か、から病人が病氣になる前に一圓借りておつた。それを本人は氣になり乍らも病氣で寢てゐる。――貸手の方は氣兼ねしながら、何かの彈みに家族の人か、誰かに、實は一寸立替へた、位の話をする。それで家族の人が病人に聽いてみると實は一寸した小遣を借つて居つた。さういふ狀景で、つまり先生の解釋のやうに、さし迫つたものでなしに、極く輕い一種笑ひを含んだ句だと、こんな風に解釋してゐるんですが僕は――

それでつまり、この句の主人公は貸手と借手の中に立つた人といふ見解なんで、……紫香さん！　どつち、やと思ひまス？

紫香＝そうですね。私も某人さんの言はれたやうに感じたんですけれど。まア何かの話のついでに一圓の借があつたといふ一つの苦笑めいたものが、この句で浮ぶやうに思ひます。

某人＝この解釋の相違が出てくるのは、きけば、といふ言葉にあるらしい。つまり病人の言ふ事を聽けばといふ事を解釋すれば、先生の言はれたやうになるし、病人に訊ねてみると、といふ風に考へると僕たちの見方になる。――さあ斯うなると言葉も六ケしい。

鋭々＝この「訊く」といふ字が這入ると訊ねたらといふ事でせう。

某人＝えつ、さうか。ぼく句を耳に入れてゐたまゝ、讀まないで喋つてゐたから――

鋭々＝しかし、必ずしも作者がその細心の注意を拂つてゐたか、どうかは判らないが、訊ね（尋ね）としてもどつちでも採れますネ。

某人＝ぼくなら、問へばとすれば、判然りすると思ひますがネ。（同意の聲あり）

鮎美＝先生のは溫かみのある解釋だし、某人さんのはユーモア的に見てゐますね。

路郎＝僕は深刻に考へてゐる。でなければつまらぬ句だ。

紫香＝この一圓が捉まへどころですね。

鮎美＝そこに人情の機微があるんですね。それが、もつと大きな金であれば句意がはつきりするんですが――。

鋭々＝（考へながら）どうも――病人から借りてゐるやうにも採れますね。

路郎＝（再度句を眺め乍ら）はは、さうなると、貸、借が逆さまになつてくるネ。

亞鈍＝ふうん、可笑しなものだな。病人が貸してゐて聽き手が借りてるやうにも採れる。あのよく錯覺のおこる繪がありますね。右の方向にむいてゐるかと思ふと、ふとした拍子に左にむいてしまつてゐる。あれみたいだ。

鮎美＝はつはは、さうですネ

それで某人さんの言はれた言葉の使ひやうですね。この訊問の訊ですネ。注意す可きですわ。

鋭々＝割合、輕い病だとそこに一圓位のことで病人を病人あつかひしてゐない。そこにユーモアがありますね。

某人＝その病人治りますネ。

路郎＝それは階級にもよるんだ。私の岳父ですが、蘆村翁は生涯を通じて教員生活をして居つた關係からかも知れないが、一圓の金でも死ぬまへに注意が拂はれてゐたと見えて、一圓の貸も借もない事を誇りとして吾らに語られた事がある。そんな關係から私の解釋が出てきたのかも知れない。滿潮君のお父さんは私の岳父と同じやうに中風で倒れてゐられるといふやうなことを耳にしてゐたので、そんな解釋が出てきたのかも知れない。然し作者は金錢問題に對して人間の心理的な動きを、かなり巧みに獲へてゐる事は同じ欄の

十錢を前後左右を見て拾

ひ

といふやうな句を作る點から考へて、この病人の句も單に病人が一圓借つてゐたといふ單純な解釋では收まらない氣がするのだ。

某人＝結局、今の先生のお話の事を考へてみるのに、句を作る場合、それが如何樣な經驗をもつた人に詠まれるか判らない。その人の經驗如何によつて色々に變つて解釋されるといふ事を念頭に置いて、一字一句もゆるがせにせず作句す可きであると、斯ういふ教訓が引出せると思ひます。

路郎＝今日は此れで止さう。句數は僅かしか拔かなかつたが、有意義な問題が出たからね。

（速記筆記）

Sata Special Klinik

内科

呼吸器病科

診療　毎年日曜

醫學博士　佐多愛彦　電話 丸八八

醫學博士　加藤謙一

醫學博士　螺良四郎　電話 綾 1151

市電堂島中町停留所北北西入

佐多醫院

大阪堂島北町　電話北八二八四

滿洲聞書

奉天　吉田水車

滿洲の松は墓所で枯れかゝり

本誌新春號の「迷信と川柳」の内で支那の龜の事がありましたが、も一つ追加さしていたゞきます。

日本では常盤木と申して珍重がる松は當地では——おそらく支那でも——凶相としてきらひ貴人の廟所とか中流以上の家の墓地とかへ植ゑます。當地に在る滿洲第一の廟所北陵の苑内には澤山の松がありますが、思ひなしか所謂松の緑に生氣がないやうです。

馬車の馬號令にかゝわらず

御案内の通り當地では洋車、馬車が交通機關の主役の形です。おもしろいのは馬車の禦者が絶えず口やかましく馬を叱り且つ鞭打ちますが、それに反比例的に馬は一向漫々的です。そしてその叱り方がふるつて居ます。ハイッとかシイッとかの意味かと思うとそうでなく、行け右へ、左へ等で、つまり號令をかけて居るのだ相です。

同舟近詠

松山　前田五健

すきやきへ忝ないと大胡坐
口舌の勇者はなんとあり餘り
廻覽板どれもぼやけた判ばかり

兵庫縣御影町　長野柳秀

縫ひながらもう派出かしら〳〵
皿運ぶ女器用に椅子を拔け
何にか又ねだられさうな妓の素振
母の手の溫みが殘るお小遣
凡人でよかつたことに子は達者

神戸　潮田明坊

我が息子ほどの學士が君と呼ぶ
千年も鶴生きられる足でなし
相談に乘るよと景氣よいらしい
スキー靴重し深窓出で給ひ

松山　芝田靈子

梅に對す八ッ手は馬鹿な巾であり
女堂々産婦人科へ質問し

賣物と桶の出て居る留守の家
煉炭の穴へバットを取り落し

今治　月原宵明

冬の蠅敗殘兵にさも似たり
日米不可避水兵さんが眼について

歸還　二句

三歳ぶり日本の水を咽喉へまで
期せずして疊の上のお正月

長野縣須坂町　高峰柳兒

艶聞だけが壯者を凌ぐなり
轉職へ番頭小僧に勵まされ
友達を頼れば冷かに待たせ

奈良縣櫻田町　嶋田翠峯

春は早や仕舞ひ忘れしつるし柿
有段者ばかりでおもろ無い勝負

山口縣　三原狂路

風の子の露路でさよならして別れ
ぐつたりと秤に乘つた鰯の値
荷を降すとこを決めてる靴直し
ネクタイを締めて轉業肩がこり

名古屋　鈴木可香

晩學の力ない身を知りながら
晩學は悲哀を知つただけのこと

隨筆

雪の話から

高尾亮雄

二月のある日、今歳はじめての大雪、むかしは街の狗ころが喜んでころこんだが、いまはスキー持つ青年たちが盛んにイキリ出す。御影の私の家の二階のカーテンを昨夜半、一寸引きあけると、ガラス越しに六甲山の化粧姿がハッキリ眺められる。頂上一空と積雪との線上にやゝ間隔をおいて二點の燈光がキラ〳〵とする。それは六甲山ケーブルの終驛と六甲山ホテルとのものだ。夜になるといつも見へるのだけれど、けふは一層美しく輝きを添へてゐる。白銀に映へての爲以であらう。

その朝、ふと本棚から中谷宇吉郎氏の「雪」といふ隨筆集を引きだしてポケットに入れて阪神電車に乘る。ゆられながら車窓からだん〳〵遠ざかりゆく六甲連山の雪景を見つゝ本の中の雪の結晶圖をも讀んでゆく。仲々おもしろい。この中谷氏といふのは北海道十勝岳の研究室に每冬籠つて、日本における雪の研究を成しとげて博士になり、世界の學界を驚かしたほどの科學者だが、同時に今では有數な隨筆家でもある。夏目漱石先生の「猫」にかいてある〃首くゝりの力學〃を語る寒月といふ男は吉村冬彦博士のことで、漱石門下の一人であるが、その冬彦の弟子がこの雪の宇吉郎博士なんだやはり系統はあらそはれないものだと思ふ。

さて地下道をぬけて阪急ビルの方へ出る。折柄丁度越後の良寛さんの眞筆展觀があつたので立寄つて拜見する。良寛さんの自筆の詩や歌には往々缺字がある。そこが却ておもしろい。凡人のやうに他人に見せようために書かれたのでないからであろふ。恐らくまた自ら讀み直しても見ないからでもあらふと、傍で森繁夫さんが評してをられたいづれも逸品ぞろひ、地元の一個人の蒐集家の方にあるものだと、良寛さんの書は謌句や詩歌のものよりも何んでもない手紙のやうなものに良寛さんらしさが見出される。一幅で二、三千圓もするといふが、こちとらには關係がない。わざ〳〵雪の越後まで行かなくて良寛さんに逢へたやうな心持になれたのは有難いことである。

この會場で赤ん坊審査會屋やとわれ〳〵仲間でいつてゐる日本兒童愛護聯盟の伊藤悌二君に逢ふと、けふ午後北市民館で岡田播陽氏の大壇平八郎に就ての講演があるから聞きにこないかと誘はれた。人も場所も古馴染みだ。つい行つてみると播陽先生いつもながら寒山拾得の片割れのやうな風顏で壇に立たれる先生は眞夏でも綿入れ着に首卷をはなさない。まして今だから當然室にあり合せの物らしいメリヤスのズボン下をそのまゝグル〳〵と卷いてあるのが誰にでも判るが先生は平然たるものである。しかし一たび口を開くと縱横懸河の辯、古今の史實を語り、現下の世界情勢を論ずる大壇の米騒動の本論に入るまでにすでに二時間半、先生あんまり熱しすぎて紅潮を呈した顏がやがて蒼白となり、無理からすゝめてこの日は休講にして貰ふ別室で二三の人たちと座談になつたが、その時私は今日始めて車中で讀んだ前述の「雪」の本の中に、下總古河の城主土井大炊頭利位(トシツラ)が天保年間に「雪華圖說」といふ本を著はしてゐる。僅か十七枚の小册子に過ぎないが、この中には八十六箇の雪華を描寫しあり、すばらしいものだ。當時の歐米の學者もこれには及ばない。世界の科學史に不朽の名を遺した日本人である。この土井利位が大坂城代の砌り天保八年大壇平八郎の騷擾事件を善所よく平定せしめたのであるが、先生御存じですかとやつてみたところが、さすがの播陽先生それは初耳だといはれた。三百諸侯の中にこんな學者もあつたのは大壇事件よりもおもしろい。

雪の學者中谷宇吉郎博士もこの天保の科學者に刺戟されたらしいのは事實であるが、宇吉郎氏を私は直接逢つて見たことはないが、親なきあとの親代りをしてゐる叔父さんといふのが、別府の奥の由布院の温泉場で、龜井ホテルの主人公油屋熊八翁の知遇をうけ金鱗湖のほとりで實に風雅な別莊ホテルを經營してゐた。頗る風雅人で百姓もする、庭作りもする、細工物もする、そして寄骨のある好々の老爺で、別府の名物男梅田凡平らと共に私とも知己であつた。しかしもう三十年も前のことであり、熊八翁も逝き、凡平もこの世にをらず、宇吉郎博士の叔父さんなるものも健在であるかどうか分らぬ。

雪のことから圖らずも今日は昔と今と人間にも何かのつながりのあることを知つて妙に感ぜられたのである。

（十六年二月二十日）

合本

「川柳雜誌」十七卷の合本が出來ました。大型の上製で背にはSENRYU ZASSHI. VOL. XVIIの文字が美しく輝いてゐます。あなたの書棚に一册如何です。尤も僅の部數しかありませんから御希望の方は大至急御註文下さい。（一册前金四圓三〇錢送料三〇錢）川柳雜誌菊版時代の合本では三卷、四卷、五卷、六卷、七卷、八卷、九卷、十卷、十二卷、十三卷、十四卷があります。（定價各三圓、送料三〇錢）振替大阪七五〇五〇（川柳雜誌社）を利用して下さい。

愚談

小畑自由朗

古事記

矢理祖古根之彥尊ハ或日鰕ヲ以テ鯛ヲ釣リ給ヘルニホクソ笑マレツツサレバ鯛ヲ以テ漁スルナラバ如何ナル大物ヤ引懸ラント思召シ給ヒテ、其ノ鯛ヲ以テ波靜ナル太平洋ニ繩ノ如キ糸ヲ垂レ給ヒケルニ、案ニタガワズ小舟程モアリツルラント思ヘル程ノ鱶ナル大魚釣上リヌ、サレバ尊ノ喜悅タトウルニ比ナク、而レバ此ノ鱶ナルヲ餌ニ漁スルナラバト思召セルコソムベナリケリ、サレバ其レヲ以テろつぶナル太キコト電信柱ノ如クタクマシキ糸ヲ垂レ給ヒケルニ、俄然！靜ナルコト硝子板ノ如キ太平洋ノ波、魚鱗ノ如キ小波立ツヨト見レバ、小山ノ如キ大波十重二十重ニ逆卷キ起リテ（註、現代ニ於ケル太平洋ノ波立チ騷ゲル因ハ此時カラナルヤモ不知）大八洲ノ天地チユルガスガ如キ怒濤ト諸共ニ、士堤ノ如キ怪魚（註、余ハ多分鯨ナラント考古セルモ、恩師戸利伊柳象博士ハ之ヲ往時海中ニ棲息セル爬虫類ノ一種、龍ノ如キ物ナリト斷定サル）釣レ上リ來テ、トタンニ我分理ト尊ヲパクツキテ、海中深苦沒死去零理戸加矢。

お伽噺

「ほら、雷さんが鳴りかけたで早やうべゞを着んとお臍を取らはるで」

「雷さん、臍取つてどないしやはんねや」

「花あられみたいに煎つて喰べはんねやがな」

「喰べたらどんな味がすんねや」

「そら知らんね」

「なあお父つたん、雲てどんなもんや」

「煙みたいなもんやがな」

「固いもんか」

「阿呆やな此の兒は、煙みたいなもんやと云うとんのに」

「ほな、そんなやはらかいもんの上に、どないして、雷さんが居やはんのや」

「うるさいな」

「なあお父つたん」

「何にやねやな」

「雲の上に竹藪あんのんか」

「そんなけつたいなもんあらへん」

「でも、虎がおるやないか」

「トラ、阿呆、そんなもんは居らへん哩」

「ほな、なんで、雷さん、虎の皮の」

「あゝうるさい、一錢やるさかいに、門へ行つて遊んでおいで」

イソップ物語

タマゴヲウマヌニワトリホド、コノヨノナカニイラヌモノハアルマイト、オンドリヲミンナミズダキニシテタベテシマヒマシタ。スルト、ドウシタモノカソレカラトイフモノハ、イクラメンドリガタマゴヲクメテモヒヨツコガカエラヌヨウニナリマシタ。

ソレデ、コノヨノナカニハ、アノヨウナモノハイラヌトオモウモノデモ、ソレソウトウノ、ナニカヤクメヲモツテキルノダトイフコトヲワスレテハナリマセン。

ダカラ、ミナサンノオカアサンガ、オサケナンカナイホウガヨイトイフテオラレルヤウナコトガアレバ、ヨクオカアサンヲイヒキカセテアゲナケレバナリマセン。

日本外史

外史曰ク世ハ擧テ非常時也、如何ニ外米ヲ食スルト雖モ之ニ中毒スル事無ク、二千六百一年來連綿窮無キ大和ヲ練リ固メ、以テ、一億一心之底力ヲ出可也。

徒然草

われつれ〳〵なるまゝにぶつしせつやくこうせいのじつをあげなばやとぞんぢはべりて、ひなたぼこしつゝふるくぎをのばしけるこそおかしけれ。さるにてもわれいかにてちがえけん、ふるくぎとまちがひていつぽんのゆびをうちのめしぬ。そのいたきことたとうるにものなく、おもはづあちちちとゆびをなめづりぬれど、これあつきにあらずしていたさきわまれるときのひめいのいつしゆとさつしたまわれかし、さはさりながらそのいたきにたえうべくもあらずおいしやなるものにかけつけちりようをこへるに、きづなかゝにおもくきゆうにふくするにはおゝごんぢゆうりようをようすとかや、あゝぢゆうりようをもてくぎをかひなばのばすせわなきあたらしきものゝいかばかりかへつるやらんとおもへばおもうほどあほらしききわみとやいはん。

會・會・會

不死鳥

日本人位、會の好きな人種は無いかも知れない。

赤ン坊を自慢し合ふ會があるかと思へば頭の禿げた人たちの會合がある。反對に髯の生えた人たちの會がある。眼鏡をかけた人たちの會がある。目方が廿貫以上ある人たちの巨人會といふのがある。同窓會がある。同級會がある。父兄會がある。同鄕會がある。學校の後援會がある。觀劇會がある。展覽會がある。晩餐會がある。祝賀會がある。記念會がある。蟲を聽く會があれば月を觀る會がある。近ごろは駄目だが朝風呂會といふのもあつた。寫眞を撮す撮影會、旅を一緒にする旅行會がある。川田順氏の話では京都から大阪まで汽車で同車する同乘會といふのもあるそうだ。この外、辯護士の會、醫師の會と言つた風に同業の會があり、その同業の會の中に又會が出來る。兎に角二人か三人寄れば、すぐ會をしたがるそして多くの時間と費用とを煙りにする。そしてこれには酒や女がつき纏ふ。大會社の重役などは、自分の知らぬ間に會のメンバーにされてゐて、何んかの話の次手に君はそのメンバーぢやないかと云はれて面食ふ場合さへあるそうだ。社會生活の上にいろ〳〵な會の必要なことは判るが、てんで不必要な會だと思はれる會の往復ハガキが毎月かなり舞ひ込んで來る。新體制は先づそんな會から一掃する必要があるのではあるまいか。

狸

補追（其の一）

前田五健

狸の話故伸び擴がる譯ではありませんが、少し補追を致します。

さぬき高松淨願寺の卷で申上げた中に「八木家秘藏の一軸」がありましたが此の軸即ち眼光睨々道服の老人が榊を持つた圖の上へ「天地受持之神」とあり、此の受持は如何にも事務的だと思ひましたが、それは「宇氣母知之神」でお稻荷樣が此の宇氣母知之神、知久產巢日神、宇迦之御魂をお祀り申してあると承りまして前記の受持は宇氣母知であると考察せられます。

康平年間關東總司の狐狸舊十二月晦日の夜半王子裝束橋の邊へ集り大會議を開くとか申して居ります。狸も善行を積み修行して正何位かを伏見から戴くのださうです。關東總會が王子なら關西總會は伏見で高松の淸光、梅光、金光、のところでお話した寒中富士頂上で總身劍か針の樣に氷る中で修行するさうですから狸も並大抵の苦勞ぢやありません。出世すると前記の宇氣母知之神と云ふお稻荷樣の位階に昇格するのでありませう。王子の關東總會の事は俳諧歲事記にも揭載されて居ります。修行、善行、昇階、祭祀、こゝに敎訓があります。狸然り人に於てオヤですな。

それから伊豫壬生川喜左衞門之卷で稻の害虫を除く話を致しましたが、前記俳諧歲事記の狐火の王子稻荷集合の時に金輪寺目赤不動の別當へ穀豐稻荷から夢告がある。此の夢告に依つて官定日が出來、云々と同記へ志田義秀氏が揭せて居ります。此の點狐も狸も五穀を護るところが一致して如何にも瑞穗の國の傳說らしく、ほゝゑましい話であります。

狐と云ひ狸と云ひ又た神社佛閣へ奉る祈繪馬、お禮繪馬を通して見た馬、龍、兎、鷄、雉、など日本人でなければ判らない敬愛と信仰の表現とその心持ちと傳說關係などよく調べて見ると有馬さんが新體制のお話中によく說かれる「人情の深さ」が、うかゞはれて來さうであります。科學も大切だが、人情も大切であります。川柳など此の人情が一つの幹線を成して居るのは有難い事であります。

さて別な狸の方面では、日本中に約二十萬頭の狸が飼養されて居るとか、國策に一と役持つて居る受持の皮です。折詰やお土產や、ぼんやりして居る人をエライ目に合す狸と違ひ、外貨獲得ですから此の方の狸がエライ譯です。

先年狸品蒐集で全國的有名な道後溫泉前、富田金皷堂主人を訪問した一旅人がありました。名刺には福島縣云々とあり、旅館で何かの折に狸話が出て女中から狸なら近所の富田さん所に澤山在るを飼養と思ひ込み訪問したのでせう。一室へ通されて狸は狸でも私の方の狸はこれですに「アッ狸違ひ……」と大笑ひしたとの事であります。福島、新潟は全國でも屈指の狸養所國で川柳でお馴染の貴族院議員より大谷五花村で有名な五花村氏が社長の大日本毛皮統制會社なども狸何萬の飼養でせう。お伽話のカチカチ山では狸が兎にやられましたが、皮と成つては狸の方へ團扇が揚り、狸さま狸さまと成つた譯です。前記の道後溫泉前、富田金皷堂へ訪問した福島縣のお方もその關係の研究家で、玩具やら何やら數百の狸御殿へ通された時は「アッ」と云はれたが、互に笑つて「狸」はイ、ですに腹皷打つて別れたなど如何にも狸らしい朗話だと思ひます。

昭和十四年には福島縣から米國へ狸の皮を澤山輸出し八萬圓……八…萬圓ですぞ、獲得したとその人のお話、八の字が面白いですな、然し其後新聞記事で見ても八萬圓でしたから化かされた譯でなく本當でした。富田さんも「八百以上蒐集」と申したか如何かは聞き洩らしました。養狸の話序でに德島縣も盛んなさうです。大入道になつて折詰を覘ふより皮と成つて國策に沿ふ全く滅私奉公が、こゝにもあります。

狸と狐は宇氣母知之神の項で申上げた樣に混同され易いです。これからお話するのも地方によりますと狸に成つて居りますが、これは狐であります。

今から二百餘年前即ち寬保二年の秋の暮……夜更けにトントンと頻りに戶を叩く音が聞へます。此處は日本海の荒波が寄せる佐渡の醫者吉川碩庵老の門前でした。

「誠に深夜で相すみませんが私方の御主人が負傷致しまして、是非先生に診て戴きたいので御座います。傷が大變痛みまして、……何卒先生に來て戴きたいとお願ひに參りました。」

一と時雨來さうな空を迎へ駕にゆられて碩庵老が行つた先は豪農らしい一構えの邸宅であります。

傷は鐵砲傷で、上品な然し眼の異樣に光る老主人は、唸つて居ります。型の如く診察、手當て

扁桃腺炎 12
効奏・期短・服内
ルジルルア錠

して歸る又た翌日迎へられて行く……數日後スッカリ氣分も傷も、よく成つた主人は先生のお蔭で助かりました御恩は忘れません。

附いては御禮の印に……と辭退するのを強て贈られたのが澤山の禮金と錦の袋入りの一刀……

康永二年八月銘の相州貞宗です……何んでも傳來には大阪夏の陣の戰場で手に入れた刀で、此の贈主は佐渡で有名な二ッ岩彈三郎と云ふ狐であつたといふ事です。安政年間の記錄にあつた話で此の彈三郎を狸と云ひ傳へて居るが之れは狐の方が本當らしく、「二ッ岩貞宗の由來傳說」であります。松山の○○醫院であつた祝谷迎へ提灯の話に似通つた點がありますが相州貞宗康永年間の裏銘入り刀が介在して居るだけ話に重みがあります。

同じ話でも落語の「田能久」……「狸」は人間が大蛇に狸も間違へられ大金を投げ込まれた朗話がありますが、この舞台が伊豫と阿波の國境の山ですから伊豫は落語の狸にまで御緣がある。

（つゞく）

川柳緣

旅にて大患となり京都の赤十字病院に幾月も苦しむ從兄衣山人の事が氣にかゝり、許す丈け長く滯在したかつた東京から入洛しベットの側に立ち見舞の言葉を陳べたのは、實に三十年振の對面なのであつた。私は毎年九月下旬からは病疾の喘息に惱み褥に就いてしまふのであるのに、はからずも京都川柳聯盟の川柳忌句會（九月廿三日夜於仲源寺）に出席するを得て始祖の墓碑刷の前に燒香をしたが、やはり季節は人を欺かず、毎夜の發作に服藥を始めかけたので、句會終了まで同志の隣に坐つて居れず、禮を失したのも止むを得ない。聯盟から其日の詠草の刷物が屆けられ、表紙うらの柄井家過去帳は誤謬があるので、將來轉用されぬ事に願つて、正しいと云ふのを念のために記載させて頂く。

柄井廻向帳

旅で家で（其の二）

二省子蛭

顯實院是相日隆信士　天明四甲辰六月二日

光明院融岳宗圓信士　寛延二己巳四月四日

蓮壽貞性信士　元祿十三庚辰七月五日

明夢童女　寛暦二壬申八月九日

莊域實有信士　七ッ水二癸巳七月十日

貞彰院鷲峰妙松信女　文政元戊寅十一月十一日

微妙院淨心法性信女　天明六丙午二月十七日

圓鏡院智月寂照信士　文政元戊寅十月十七日

泰岳常然信士　正德元辛巳五月十二日

往蓮社空響源生雲意居士　寛暦十三癸酉十月十八日

智月妙元信女　寛暦三癸酉十月十日

觀月妙空信女　元祿十三庚辰八月十日

覺曉童子　寛暦十四甲申二月十一日

夏泡童女　享和元辛酉六月一日

慈光院體心妙智信女　寛保元辛酉八月二十二日

契壽院川柳勇緣信士　寛政十戊戌九月二十三日

全幻童子　享保十五庚戌十一月二十七日

心鏡院常照妙光信女　文政七甲申四月七日

但受院淨利快樂信士　文政十丁亥六月二日

無量院長遠妙壽信女

孝達妻逆修

教受院雪山源理信士　天保十四癸卯十月十九日

私が若かりし日の東京住の折りは、揃者癖もあつて龍寶寺へはよく參詣し榮久町附近の地理には通じて居るつもりであつたので、九月十二日梅本塵山翁をお訪ねし、寺へ行く電車停留所丈けを承はつて出掛けたのですが、どうしても探し得ない。人にたゞすと町名變更で判らぬといひ、又永住町を敎へて呉れたお方もあり、愈々迷ひ兒になつて居るうちに、一天掻き曇り豪雨となつてしまつた。町並大改正は當然の事ではある。翌十三日八十島杜若さんに案内をお願ひした。君の家と相隔る遠からざる所なのだからだ。路次のやうな道路に面し寺域も狹まり大震災後のバラック建のまゝで、史蹟とはいふものゝ墓碑ある外川柳を語る何物もない。前記の過去帳も燒失したのである。

私は以前から墓石には「勇緣」と刻されてあるが、「緣」と口誦して拜むでゐた。その事は曾て「湯の村」誌に書いた。「緣」でも「絲」でもかまはない。一南無川柳」と唱へた折りの方が多いのではあるが、今度は刻してあるき川柳、「緣」を溫め新しき川柳緣を得んために旅に上つたのである。須らく川柳人は「緣」を尊重し相互敬愛相互扶助による研究精神を以て、此道を歩まなくてはつ通り「川柳勇緣信士」とよみ下し合掌した。特に「緣」の一字が身にしみるものありしに因る

＝私は古川柳の根諦たる使命が達せられないのだ。

雪の夜の思ひ出

橋本美奈子

サラサラと降る雪の夜、海鳴りを聞きながら母はよく炬燵で私達兄妹に昔話しをしてくれました。それはきまつて狐や狸の話でした。子供の頃の樂しかつた思ひ出はこの上もなくなつかしく、今でもはつきりと記憶にのこつてゐます。その内でも特に幾度もきいた嘘の樣な本當の話を書いて見ませう。

私の母の兄は今ではもう九十に近いが、若い頃、冬の寒い夜に、おそく一人でせつせと田の小徑を歩いてゐると向ふから見事な嫁入りの行列が續いて來たさうです。幾本かの簞笥、長持田舍には珍らしい立派な道具に、これは又どこの嫁さんだらうと見惚れてゐる内に、一番後の提灯持の男が非常に小さいので、伯父さんは不思議に思つてその人ばかり見てゐるとだん〳〵小さくなつてしまいに消えてしまつた。ォヤッと思つてツイと後を振かへつて見ると何と今の行列は後かたもなく消えてしまつて元通りの靜かな小徑となつてゐた。これはてつきり狐の奴にだまされたんだと思ふと急に氣味惡くなつて急ぎ家に歸り、母に(私の祖母)この話をすると、そりや狐の嫁入りを見たんだ。緣起がいゝよと喜んださうです。

祖母の云ふ通り緣起がよかつたのか、母はその年の六月、一錢で白粉を買つて顏へぬり、伯父さんが見た狐の嫁入りの十分の一程の列で父の許へお嫁に來たのださうです。時折ザザーとナダレの音をきゝながら母の面白い話は續けられて行くのでした。

霜を含んで寒々と光る冬の月をながめては雪の降る故郷の夜を思ひ出します。

(前分の夜)

滿洲川柳展 (前列向つて右より琴童、呑湖、窓花、白隆、しげる、後列右より弓人、戰車、廣古刀、冬洋、水車の諸氏一月廿日滿毛百貨店にて)

川協の★★★★ページ

▼第三回西日本鐵道人川柳大會(本年は主催地大阪)が川柳人協會後援の下に二月廿二日夜、大阪鐵道局倶樂部樓上に於て開催され、福田山雨樓氏(本省)は東京から櫻川不水氏、多田市多樓氏濱田賢次氏等は下關から、濱田久米雄氏、大森風來子、長谷川秋史氏、荒西草雲子氏、石原伯峯氏等は廣島から、本田ユリエ氏、岡眞理子氏等は岡山から參會され、これに京阪神鐵道人五十餘名、福田山雨樓氏、並びに川柳人協會理事長麻生路郎師の柳話があつて頗ぶる盛會であつた。

▼西日本鐵道人川柳大會の翌日久米雄、伯峯、秋史、草雲子、市多樓、賢次の六氏は水客、紫香兩氏の案内で橿原神宮へ參拜された。

▼麻生路郎川柳講座へ左記感謝狀が届いた、講座の諸氏へ深甚なる謝意を表する。

感謝狀

今次事變ニ際シ出動軍隊慰問ノ爲恤兵品ノ御寄附ヲ辱ウシ感謝ニ堪ヘス茲ニ深厚ナル謝意ヲ表ス

昭和十五年九月

陸軍大臣　東條英機

麻生路郎川柳講座有志一同殿

▼夕刊大阪新聞社主催大政翼贊會大阪支部、大阪中央放送局後援の「健全慰樂展覽會」へ麻生路郎主幹は新體制下の健全慰樂として川柳詩創作を大衆へ要望されてゐる。

▼日本川柳協會大阪支部の發會式が二月二日に擧行された。郷乘主義の人々や獨善主義の人々によつて、誇大に報告されてゐるが、僅々五十餘名の集合に終たつらしく、出席者の殆んど全

一路集

募集句

百姓

滿潮選

一粒の種子も百姓大事がり　神樂
百姓で一生過す有難さ　九柳
職業は百姓ですといゝ身體　年之
算盤を持つ百姓の稼ぎ振り　一龜
利鎌さく〳〵今日百姓としての幸　柳太
拇印捺す手付百姓と云ふ手付　一秋
植付へ都會の色で歸へつて來　要兒
親からの百姓である顏の艶　靜子
土の香も大日輪も有難し　博行
百姓の影が夕陽に長く伸び　勿來
一粒の米百姓の汗に見る　棟友
一番星まだ百姓は田圃に居　みづほ
百姓といへば信用して呉れる　香林坊
百姓もよいなと思ふ汽車の窓　若榮
奉仕隊歸へつたあとで植ゑ直し　石鹿
開拓の鍬にもなれた兒の便り　愛鳩
百姓の好きな子も居て家業無事　牛歩
滿洲の地に農本を說き下し　對州坊
百姓になると本人靜かな臍　風來子
百姓の委輕襲されておき　抱逸
百姓の遺族の畑へ手が揃ひ　一湖
百姓の川を越えての隣組　酒井
百姓をしてみた頃を懷かしみ　千斗
百姓を嫌ひ陸軍少尉なり　耕水
農民の詩となり夕燒雲が飛ぶ　眞理子
廻覽板鍬を片手に持つて行き　久枝
太陽にむいて百姓立つてゐる　斗風
特急が通り百姓手を休め　美奈子
開墾のこの一鍬が新天地　ヒデヲ
百姓も出來ず眞白き指を見る　惡源太
轉業の世を百姓のほつと居る　小城子
夕燒へやつと百姓腰を上げ　九坡
職域奉公百姓の指の節　灯竿
百姓のハイカーを見る顏となり　ユリエ
百姓へ春夏秋冬まともに來い　自由朗

★おことわり　塚越正光先生の選教科書が本稿締切までに未着につき次號へ拠載いたします(編輯局)

員が役員の形である。台灣の某誌では三十餘團體が參加したやうに報ぜられてゐるし、大阪の某誌では柳團代表六十餘名參集と報じてゐるが、六十柳團は愚か三十餘團體が、大阪の何處に存在するのか、團體代表として役員になつてゐながら、團體を有しない代表者などもゐるとか聞かされては啞然たらざるを得ない。まあ大阪の體面を汚さぬだけには育成して貰ひたいものである。

日本文化運動に默々として精進し、健實なる歩みを續けつゝある我が川柳人協會員並びに川柳雜誌社系の人々は如上の大阪支部には參加してゐないことをこゝに附言しておく。

▼山梨には山梨川柳協會が生れ朝鮮には朝鮮協會が生れ、滿洲には東亞川柳作家聯盟が生れ、台灣には台灣文藝家協會が創立せられ、これに川柳部が抱擁されてゐる。

▼阿部佐保鬧氏(東京)は、川柳に理解ある伯林兒ハーバート・ツアヘルト博士を松本高校官舍に訪問、川柳獨譯について懇請された由、氏の川柳海外進出運動は更に一歩前進の形である。

▼安井ひろし氏(徐州)徐州に三月誕生の日本商工會議所の書記長に就任された同氏は隴海東亞新報へ呂牛の俳號で俳句會に出席されてゐる。

▼佐々木三福氏(大連)は二月十六日上海へ、二十一、二日頃長崎へ廣島を經て上阪される由の通知に接した。

▼楊井二南氏(神戸)は二月九日泰國から歸朝。▼米谷松太樓氏(南支)から元氣で軍務に精勵されてゐるとの賴りと句に接した▼秋月宏方氏(和歌山)は中耳炎のため二月八日手術、同市の御前耳鼻科病院へ入院された。▼坂口芳一氏(大阪)は舌癌の手術で阪大病院に入院されてゐたが經過良好二月末退院された。▼古川鶴聲氏は故郷今治の御養母が亡くなられ歸郷されてゐたが二月三日歸阪された。▼宮尾しげを氏(東京)は海軍慰問を終へて二月下旬歸京された

柳界展望

消息

▼鈴木九坡氏(不朽洞會員)は二月一日來阪、その夜の本社句會へ出席、散會後路郎主幹と歡談翌二日松坂俱樂部川柳講座に出席、三日歸岡された。▼小畑自由朗氏(不朽洞會員)も二月一日に來阪、本社句會に出席。▼大森風來子氏(不朽洞會員)は二月一日來阪、本社句會に出席。▼麻生路郎夫妻、西田艸樂氏、同令息　福井哲氏、麻生アート氏の一行六人、二月九日早朝、奈良市へ吟行。縣觀光課佐野氏の東道で市内見物。▼麻生路郎主幹二月十日尼崎市、住友親友會川柳會に出席、十一日尼崎川雜支部句會に出席。

▼有恒川柳講座晩餐會(大阪)二月十三日夜、路郎主幹夫妻出席▼松坂俱樂部川柳俱樂部川柳講座(十六日)、阪大川柳會十九日何れも路郎主幹出席▼川雜堺支部は二月十八日夜角堂居で例會開催▼川雜布哇支部では一月廿一日に新年句會を開催。▼福田山雨樓氏(東京)は冬の北海道へ九日間の旅を續けられた▼龜井晨修氏(函館)は川柳に手を染めてから滿廿五年になるので二月十五日自祝の會を開かれ宿題「鯛」の選句を路郎主幹に依囑された。▼石曾根民郎氏(不朽洞會員)は信州日日新聞松本の柳壇を擔當し、川柳普及に盡瘁されてゐる▼濱田賢次氏(不朽洞會員)は下關から、郷里日和佐港へ歸省されてゐたが、西日本鐵道川柳人大會があつて、市多樓氏の出席されると聞き來阪され、開會の日に、不朽洞へ市多樓氏と共に來洞された。▼濱田久米雄氏(廣島)は二月十二日から德島、高松方面へ出張歸途今治、松山の柳人を訪ねて歡談された由。▼ハワイの古川風竹氏から、如露のことを聞いて來られたので如露沿革の文獻をお持ちの方は編輯局まで知らしていただきたい。▼澤田四郎作氏(大阪)から左の通信に接した「路郎居雜感は誠に見識ある卓見と感心仕り候高鷲亜鈍氏の筆は筆者の文化人の素養がしのばれて敬意を表し候五健氏の狸の話は小生も好きな狸の事とて面白く拜見、小畑自由朗氏の「たつた一言」も思はずもらひ笑ひをしましたが、さすが・柳人のねらひどころと感心致し候蛭子省二氏の健筆も「川柳雜誌」になくてはならぬものゝ如く考へ候」▼今枝思老山氏は三隣組を併せた三和町内會長に選任せられたさうである。氏の如き熱と力の人こそこれからの町内會長として最適任者であらう。▼眞下麥作氏(山口縣)は徵用令により○○○海軍建築部に入部され皇國のため奮勵されることゝなつた。▼高田抱逸氏(大牟田)はカン〳〵の川雜系で麻生早鐘川柳會と主幹の姓を會名とされてゐるなど、これこそ全國に例のない會名で、その熱のほどが察せられる。

慶弔

▼石井白面人氏(不朽洞會員)は舊冬十一月二十九日華燭の典を擧げられた。▼夷一笑氏(不朽洞會員)は一月二十三日長男照男君を擧げられた▼金政細泉氏(大阪)は一月十日結婚された▼西尾栞氏(不朽洞會員)は一月十六日女子を儲けられた。▼須崎豆秋氏(不朽洞會員)の令孃二月二日永眠された享年十九謹んで悼む

轉居

▲上沼弘有氏は兵庫縣大庄村今北字南長兵衛新田十六番地牧原清方へ▼森田文福氏は山口縣美禰郡大嶺町草井川へ

★社告

▼川上三太郎、前田雀郎兩氏を社規により客員名簿より拔く。▼天野卜居氏は家事の都合上、二月末日限り不朽洞會を退會された。

非特異性全免疫元
オムニコツト
本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。
(適應症候等)
淋病、各種膿疾、肺(膿)瘻疾、扁桃腺炎、中耳炎、蜂窩織、其他各科、急性、慢性、熱性、疼痛性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し廣汎に渉り著効を奏す。
(特長)
注射無痛、副作用絶無、用法簡單、奏効迅速、價格廉賤。
(包裝)
一瓦壜入　一圓五拾錢
一瓦壜入　一圓三拾錢
一瓦壜入　一圓五拾錢
一瓦壜入　一圓五拾錢
一文壜入　一圓五拾錢
發賣元　株式會社黑田藥品商會　大阪・東京

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿規約

▼用紙は原稿用紙
▼文字を正確明瞭に
▼開催月日及場所記入
▼締切は毎月廿五日
▲投稿先は本社宛

本社二月例會（大阪）

二月一日　於　御津八幡宮

出席者（順不同）
路郎・一龜・鮎美・美知夫・自由朗・寄與史・玲之介　要兒・蒼茫・虻蜂・かほる・紫香・翠峰・千斗　桃園・銃人・亞鈍・花笑・水仙　指洋・競舟・細泉　紫月　利仙・香林坊・夜王　久人・艸樂　八九滿・形水・籌彦・潮花・欣一・鼓愁・水客・萬的・風來子・九坡・一笑・蓂乃・リリ

席題「慌てる」　互選

蒼鞏に慌てた亭主ほつとする　銃人
慌てゝる人に切符の順があり　欣一
慌てゝも自分の物は持つて居り　細泉
お世辭など言はれてふたりちと慌て　九坡
慌てやう田舍の人とすぐ判り　古林坊
慌て者お釣の釐に引かへし　美知夫
珍客へ何う慌てたか酢を飲ませ　要兒
慌てもの笑へぬ悲劇こしらへて　翠峰
一向に慌てず女房着換へて來　紫香
慌てたと見へ割箸が足らぬなり　かほる
慌てずに居らりよか戰地の子が歸る　艸樂
うたゝねの指は火鉢にハジかれる　玲之介
占領地慌てゝ逃げたあとばかり　競舟
少うしは慌てなはれと叱られる　潮花

席題「横顔」　八九滿選

横顔へふと平凡な影を見せ　九坡
父に似る横顔不遇もそれに似て　紫香
横顔に冷たい人と知る火鉢　水客
英雄に似た横顔を寫される　風來子
横顔のあまり似てゐた聲を呑み　水仙
新人の横顔經濟欄で見る　香林坊
横顔がはつきり見えた無心狀　艸樂
横顔を見ると決意のあり〳〵と　鮎美
よこがほへ冷たい人と氣付く鼻　美知夫
横顔へ無理な言葉はつづけられ　細泉
横顔を人に見られて待ちつゞけ　八九滿

席題「歸へり道」　艸樂選

誘惑に勝つたが淋し歸り道　籌彦
香具師の輪に足を止めてる歸り道　美知夫
バーを出て歸る男のふところ手　万的
通知簿と一緒が辛い歸り道　玲之介
金策はみんな外れた歸り道　要兒
歸り道市場の角で一人へり　美知夫
二三人姿を隱す歸り道　水仙
歸り道樂な電車を待つて乘り　籌彦（カズヒロ）
子の影が待ち伏せてゐる歸り道　風來子
歸道話が合うて歩かされ　寄與史
歸り道同じ時間の人と人　亞鈍
歸り途十圓札は安かつた　八九滿
疑ひがはれてうれしい歸り道　鮎美
新妻の笑顔がうかぶ歸り道　利仙
歸り道ニュース見る氣にふと變り　紫香
嬉しさを無口に包む歸り道　九波
歸り道自分の馬鹿を知る月夜　水客
四つ辻でもう待つてゐる歸り道　欣一
あれこれと荷物が多い歸り道　鼓愁
ふと花を摘む氣になつた歸り道　潮花
歸り道何の工場か戸が閉り　かほる
いゝ連れがあつて夜に入る歸り道　水仙
あゝ今日は奉公日だつた歸り道　銃人
此の道は俺のレールだ薄給だ　玲之介
歸り道言はねど女房氣にかゝり　艸樂

席題「鼻緒」　潮花選

鼻緒など家庭で出來る隣組　籌彦
鼻緒の色をよつて出る　美知夫
白足袋へ鼻緒の切れた下駄をはき　水仙
台所鼻緒の弱いのにあきれ　翠峰
歸還して鼻緒の下駄をはき　自由朗
本皮を鼻緒屋そつと出してはき　かほる
下足番に新らの鼻緒をゆがめられ　万的
鼻緒きつく晝の船場を女行く　一笑
桐台へ無地の鼻緒をのせて見る　紫香
石垣へもたれ鼻緒をすげて去に　夜王
男の子鼻緒の堅いのを好み　八九滿
借りてゐる鼻緒がきつい日向こぼ　水客
ちと遲れ見合ひの鼻緒見て上り　美知夫
褒錢を持つて鼻緒をたしかめる　同
鼻緒だけ替へて女中のものとなり　鮎美
許婚鼻緒がきつい日本橋　潮花
塗下駄の鼻緒は宵の雨を吸ひ　風來子

席題「通り拔け」　風來子選

通り拔けしまひに顔をおぼえられ　美知夫
通り拔けならぬと近道教へられ　千斗
看板が落ちて來そうな通り拔け　かほる
通り拔けおむつの下をかひくぐり　虻蜂
帽子とつたまゝで神社を通り拔け　万的
通り拔けの影へ段々腹が立ち　水客

通り拔けまんまと蜘蛛の巢にかゝり　寄興史
通り拔け子供の列が笑ふなり　鮎美
通り拔け露路へこぼしたコンペイト　一笑
豆腐屋の車が出會ふ通り拔け　虻蜂
通り拔けチラリと見へる天守閣　八九滿
通り拔け少さな犬が吠えてゐる　水客
敎へ子におじぎをされた通り拔け　美知夫
鳴る汽笛よその島を通り拔け　九坡
通り拔けさへぎつてゐる紙芝居　鼓愁
よその小父ちやんが僕の島を通り拔け　九坡
角店を巡査斜に通り拔け　風來子

兼題「敎師」　鮎美選

敎師まだ若い氣持が捨てきれず　一笑
家庭敎師家風をふつと背に感じ　風來子
舌打ちをしながら敎師採點し　桃園
道端で逢へばやさしい敎師の瞳　紫香
夕暮を敎師四、五人連れで退け　水仙
宿直の敎師靜かな雨を聞き　夜王
敎へ子の見舞嬉しい日の敎師　美知夫
放課後の窓に敎師の物思ひ　翠峰
君づけで氣輕に敎師手紙くれ　亞鈍
信賴が出來る敎師の變りもの　桃園
卒業して敎師に酒をすゝめられ　万的
椿掃く敎師へ餘暇のある眞晝　潮花
丸刈の敎師へ寒い春となり　一笑
俸給を貰ふ敎師の手がきれい　夜王
十年目敎師の白髮さみしいね　万的
蒼い空敎師は一人旅が好き　鮎美

兼題「慰問袋」　路郎選

慰問袋勝つて歸れのお守りも　艸樂
慰問袋兵隊さんが泣くそうな　八九滿
慰問袋コレハ妹コレハ母　桃園
名が無いを慰問袋は淋しがり　水客
凸凹の慰問袋へ字が歪み　千斗
慰問袋の禮が忘れた頃に着き　寄興史
慰問袋太平洋は波高し　八九滿
慰問袋抱いて北支の泥に寢る　九坡
慰問袋捕虜にもわけてやる日向　鮎美
慰問袋前進の兵士追うて行き　欣一
英靈の宛名で着いた慰問品　美知夫
くた〳〵になるまで慰問袋持ち　九坡
慰問袋に二年生い組喜田阿以子　鮎美
童顏で慰問袋の紐を解き　かほる
慰問袋から修整すぎた娘の寫眞　自由朗
幾山河慰問袋は汚れて來　玲之介
慰問袋中味を見せる姉妹　風來子
遺骨にも慰問袋を開けてやり　自由朗
慰問袋その熱誠に裂けんとす　艸樂
慰問袋母の若々しい手紙　亞鈍
慰問袋新聞雜誌賣つた金　路郎

雜川　廣島支部句報

一月十日　於　廣鐵倶樂部

大森風來子報

ビルデイング何處の社長か見送られ　市多樓
事務所費がやつと拂へてビルに居り　俗菩薩
ビルデイング下から眺め氣が疲れ　正堂
子に肩をもませて父はよくしやべり　風來子
もういゝと言へば肩もみたゝき出し　同
肩あげの小僧なか〳〵負けてゐず　月浦
己が身に似た子の肩を持つてやり　伯峯
何時からか肩持る癖も父に似て　市多樓
肩書が殖えるたんびに肥えてゆき　伯峯
成長の肩へ兩手を置いて見る　幽香里
高樓は舗道に長い影で暮れ　月浦
記念撮影かたくなつてる主賓席　伯峯
飛行機の影が走つたいゝ天氣　秋史
口論に勝つて淋しい己が影　三昧
倒さ富士官費旅行の窓にゐる　秋史
昔話南の椽に座を移し　久米雄
名の付いた狐が居つた工場也　俗菩薩
先生の昔話へ詰め掛ける　可受
密航もしたと古老の眼の若さ　須彌浩
初孫へ昔話の種が盡き　月浦
附添の眼がしやべるなと知らせて　風來子
附添と母のベッドの横に寢る　同
附添がほんとに恕る有難さ　俗菩薩
母の眼に附添賴りなく見られ　秋史
附添を起したくない用が出來　久米雄
心得て附添そつと座をはずし　須彌浩
附添も同じ粥で朝がすみ　風來子
双方が白紙に還る腕を組み　久米雄
白紙から考へ直す氣のもつれ　幽香里

雜川　下關支部句會（下關）

於　市多樓居

國弘半休報

干城の前で誓ひを立てる妻　明
干城となつた我が子の賴母しさ　みつる
新秩序築く干城達の夢　比呂志
干城の俺にならへと手紙が來　半休
干城として征つ朝は晴れてゐる　柳月
干城に成る日が長い十九歳　鐵人
干城となつて希望の血が躍り　潮流
干城となる體質を持つ譽　米三
素晴らしいニュースへ辭令まだ來ない　市多樓
舌打ちをして裏口を荒く出る　九呂平
貧けと知り舌打ばかりやつて居り　つゞる
舌打ちをして食べるのも友の仲　山彦
舌打ちをして失敗の手を洗ひ　市多樓
舌打ちをしたのを主人聞きとがめ　柳月
舌打ちをした羊羹がとけて行く　賢次
舌打をして子の無理を聞いてやり　默笑
舌打ちをして繰り返す汗を拭き　白陽子
配給の餅も不足な年の暮れ　草路
師走からやつと逃がれた借用證　賢次

門松も餅も小さくする時局　米三
師走の灯モンペ姿のまだとけず　あきら
自惚れも自信も消えて大晦日　默笑
除夜の鐘意義ある年が暮れかゝり　正晴
獨り者師走へ長座して平氣　九呂平

水客、紫香兩氏歡迎句會

來客へ母は手ぎはのありつたけ　半休
來客が殘してほしい菓子が出る　哲志
風邪氣味の來客に出す玉子酒　水客
猫好きの客を知つてる猫が來る　紫香
來客へ寡の畑を見て貰ひ　水客
長旅のつかれた窓へ富士の山　秋吉
スタンプ帳だけで歸つて來る旅行　代志久
子供への名宛旅から送る物　不川
一人旅急に下車する氣に變り　紫香
氣が合つて旅のコースが變りがち　代志久
朝の茶の香りも旅にゐる心　市多樓
旅せはし故郷の山を見て通り　水客
ゲートルを着ける速さも二年兵　不川
迅速な手配港で押へられ　水客
有頂天紅茶の冷えるのも知らず　市多樓
有頂天襖を閉めるのも忘れ　紫香
有頂天ヂット「スパイ」の眼が光る　半休
勝獨樂がまだ〳〵廻る有頂天　不川

雜川　**堺支部句會**　（堺）　村上角堂報

お風呂屋で相談も出る隣組　亜鈍
デパートで麵類ぎらい腹がへり　葭乃
弔詞にも臣道實踐の文字を入れ　角堂
この頃の男平氣で米のこと　貴志子
ニュース映畫の一番のりは氣樂さう　葭乃
ぼん〳〵も飯盒炊事してゐるか　豆秋
宣撫班新戰場の後を追ひ　角堂
眠むかつた事を忘れぬ歸還兵　葭乃
足踏みの步哨濃霧の中にあり　角堂
鬚面でお雜煮食べることだろう　豆秋
英靈を迎へ不足は言ふまいぞ　亜鈍
戰ひの兄を案じて拭掃除　綠雨
皇軍にすまぬと思ふ湯があふれ　貴志子
窓不足きづいた儘に建ち上り　同
窓少しあけて湯加減尋ねてる　喜堂
お隣へ窓から鍵をあづけとき　路郎
春の窓手招く人もあつてよし　同
うらゝかさ手眞似で話す窓と窓　かほる
仕立物絞りが縫へてホッとする　喜堂
仕立物あと三枚が氣にかゝり　孤篷
仕立物夫も一寸批評する　綠雨
人絹の風呂敷で來る仕立物　貴志子
仕立物とにかく一度手を通し　かほる
今晩はあんまを賴む仕立物　路郎
福引の傘が役立つ雨に逢ひ　角堂
大物の福引當てゝどないしよ　孤篷
福引の包み紙だけとつて持ち　豆秋
福引を引かしてもろた下足番

雜川　**四ツ橋支部句會**　（大阪）　中内翠芳報

一月十三日

贅澤がモンペイ服に抑へられ　德磨
モンペ服聲高々と水搬び　秀甫
御先祖の古着もといてモンペ服　夢想
着初めは恥しそうにしたモンペ　翠芳
配給を手傳うてゐるモンペ服　綠雨
品切れにあきらめにくい子澤山　かほる
ポケットへ慌てゝ入れて舉手の禮　山人
ポケットへ兩手を入れて遲刻する　卜甫
上樣とだけポケットの勘定書　靜月
ポケットの初月給が氣にかゝり　防風
ポケットを何度も探す忘れ物　夢想
ポケットの名刺で騷ぐ晝休み　朗舟
派手な子のポケット派手に着いてゐる　美奈子
ポケットを探り刑事は訊きなをし　綠雨
ポケットマネーねえ〳〵で空になり　翠溪
ポケットの數も嬉しい子供服　芦穗
品切れを見越して店は賣惜しみ　翠溪
一列にならばしといて有りません　翠芳
品切れが內所ですよと別に出し　夢想
品切れに何回も來てぐちを云ひ　綠雨
夜遊びもせずに神經衰弱症　千坊

雜川　**尼崎支部句會**　（尼崎）　於毬夫居

十二月六日　酒井美知夫報

鹽水の含嗽ですます父の風邪　寄與史
紙芝居焚火の子供皆な集め　八櫻
寺焚火無緣の塔婆積み重ね　柳千
疊屋のとんど近所の顏がより　美知夫
御用聞き焚火にしばし手をあぶり　加久榮
御近所の焚火としつた窓を閉め　久仁子
デパートの窓から暮れの街を見る　綠翠
十二月GO・STOPが邪魔になり　正路
表具屋がもうけたゞけの十二月　寄與史
金融のビラが目立つも十二月　美知夫

雜川　**岡山支部句會**　（岡山）　於禁酒會館

一月二十五日　鈴木九坡報

足音も春めく跨線橋のひる　眞理子
若鮎に湯女の足音親しかり　四三坊
横綱へいつも推される無口の子　信太郎
松の內子に挑まれて負けつゞけ　三昧
肉と肉搏つて國技の花が咲く　素木
初土俵故郷のラヂオへ父と母　灯竿
一萬圓の夢へ果敢ない人の列　ユリエ
夢一つ見ぬ健康も亦さびし　紫翠
奉公の堅い布團へくにの夢　同
歸還兵愛馬の夢に寢そびれる　魔天樓
悪い夢見て御無沙汰へ寄つてみる　三昧

現實と夢と別れる陽があたり　灯竿
銃後なり子の夢などを見たけれど　耕水
幾百里夢で逢ひもし話もし　蟻蜂
夢多き日の若草を摘んで捨て　風來子
乳母車犬の居る家遠くさけ　紫翠
乳母車電車を遠くよけて待ち　灯竿
乳母車押す人もなく子は逝きぬ　九坡
献納の指輪思ひ出たちきられ　ユリエ
病む人の指のルビーを悲しく見　洋子
指先に命があつたピアニスト　千苦樂
運勢へ差出す指に爪が伸び　風來子
大陸の夜へ故郷の唄も出る　九坡
シュークリームのとろりと宵の灯が淡し　眞理子
飯喰つて逃げたか櫃にある指紋　市多樓
油手の指紋はつきり機械室　幽香里
指紋ある場所白墨の輪が不氣味　伯峯
信じきる母へ哀れな子の指紋　風來子
指紋一つ二つペンキが乾いて來　好良
この指紋世に一つかとしみ〴〵見　洋子
この指紋何不自なき筈の人　三昧
鑑識課勤務指紋へ春が逃げ　九坡

雜川　**今治支部句會**　（今治）

一月十日　長野文庫報

颯爽と門松を出る儀禮章　漫歩
門松の高さ日の丸まで屆き　鬼外
門松も小さく年賀狀も來ず　心府
門松に故國を偲ぶ居留民　向上庵
松の内過ぎての賀狀筆不精　鳥生
ミツキーの靴ぬげそうな程うごき　鬼外
漫畫欄急所に觸れるものがあり　文庫
漫畫など描いて給仕の少し暇　宵明
定紋の過去華やかな藏ざらへ　同
池一ぱい波紋ひろがりもとの冬　心府
商賣で行けば後輩理窟云ひ　文庫
不愛想今に見ろとも客思ひ　向上庵
便箋へ最後の一字書きそこね　市多樓
便箋ですむ受取は高が知れ　漫歩
うれしさは未だ讀み足らぬ便箋紙　夢葉
便箋の證文で借る十二月　地下水
冗談へムキになられたあほらしさ　鬼外
泣き出してから冗談だとも云へず　勇夫
門口で茶碗を碎く悲しい日　漫歩
子の茶碗親の茶碗でふせて居る　河鹿
色街の國策型はよく目立ち　坊中
丸々と兒はふとつたり茶碗かげ　宵明
めざし燒く煙の中に對座して　義重
コスモスの風へ鶏眼をつむり　宵明
秋の蠅茶碗へ一つおとろへし　市多樓
お茶碗の順に夕餉へ子はならび　同
平凡に毎日同じわが茶碗　文庫
お茶碗も揃つたかへと母忙し　坊中
思ひ出になる飛行機の繪の茶碗　ソケン

雜川　**塗青支部句會**　（大阪）

一月二十三日　於染料會館　淺謙公報

圓滿な夫婦近所をうるさがり　謙公
圓滿に話が進む隣組　京詩
三ケ日だけは大きな顔で呑み　香林坊
三ケ日子は三日目を淋しがり　謙公
三ケ日此處でも酒のない話　光路
押入れへ皆押しこんで三ケ日　同
樟腦の匂ひをさせて三ケ日　京詩
病む人の手から賽錢にぎらされ　久
裏庭は掃かずに置かう雪の朝　香林坊
朝の雪トラック遠慮なく走り　京詩
底冷える雪へ座敷は炭をつぎ　光路

雜川　**渚支部あざみ合同句會**　（大阪）

一月二十九日　丸尾潮花報

雪少し積んで古木の梅ひらく　K子
梅干だけですませてる一人もの　水仙
屋上の日當り鉢の梅が咲き　ひさみ
入營者とぶ盃を受け切れず　風月
盃を荒くつき出す醉ひとなり　美竹
美しい舞妓に盃さしてやり　双葉
美しい惱み盃ほしつゞけ　競舟
盃をふせて長男めしにする　千代子
大盃でもらふと叔父もいける口　澄子
不氣嫌な盃妻の眼が淋みし　潮花
十八九兄の仕科に氣をつかひ　順子
十八九鏡花好みの柄で出る　花美
心配な話が多い十八九　みのる
東京の空が戀しい十八九　關子
看護婦もいゝなと思ふ十八九　花子
十八九蒲田に住むをうれしがり　秋子
燒芋へ何がおかしい十八九　紫月

阪大川柳會　（大阪）

丸島利生報

漁村いま神代ながらの色であけ　たけを
漁村曙風の子になろ凧を擧げ　方正
エブロンのまゝ配給へ走らされ　たけを
町内の意志を通せば足らぬ炭　柳秀
配給の炭に組長手を汚し　同
配給にさては困つた金が要り　同
配給の來るまで二人外で食ひ　一彌
配給の炭を見て來た風呂歸り　桑
配給にお寺の人數疑はれ　春巣
配給の來る迄隣組で借り　同
新體制一役買つた紙芝居　利生
用事だけ書けば繪はがきでも餘り　春巣

隣組苦肰が云へぬ餅がつけたけを　同
隣組から來て病人に智慧をつけ　同
遺言の最後妾のことに觸れ　柳秀
女給他に變へる醉なく眉を描く　栞
達筆な賀狀よこして未だ嫁かず　同
三ヶ日妻の雜誌も讀んでみる　水虹
退屈な思ひは濾紙に殘る水　同
名取とか言へど年增の太い足　方正
妻を喪つてから結核の怖れやう　同
達めよ殖やせよ少しは變る美人觀

松坂倶樂部句會　（大阪）

一月十二日　石井白面人報

あの頃もこの頃もなく子澤山　生々庵
あの頃をそつとしまつて嫁にゆき　同
あの頃の百圓だよと念を押し　普天
あの頃は恨みましたと禮に來る　同
ポルサリノまだあの頃のしゆみがあり　孤蓬
石斧石鏃おんなじ色に燃える火よ　同
金借りた話を醉うてする自分　白面人
四年後は地圖から消えるとも知らず　同
興亡知らず入場式の燦として　同
別莊も藏も果敢ない統制か　同
何云うてまんねとキャッシュ拂ひのけ　生々庵
札束を積んでこれでもかこれでもか　同
現金の外に切符の要る時節　普天
賣り切れて掛けもキャッシュもあらばこそ　同
懷のキャッシュが足を浮き立たせ　美根子
キャッシュだビルだ小僧も少しつかひ馴れ　孤蓬
五阡圓キャッシュにすればこればかり　同
蒼白く紙幣束と居る出納課　白面人
梅の茶屋見合の客と知つており　美根子
御法事の歸りを梅の客となり　同
梅の枝又も隣のために咲き　同
梅林を拔けて恩師の宅を訪ひ　白面人
松竹梅少し開いて屈けられ　孤蓬
嫁き遲れ又梅が咲き桃が咲き　路郎

一月二十六日

時々は電車がひゞく紙芝居　孤蓬
紙芝居裏贊論も心得る　普天
子を抱けば平氣で開ける紙芝居　白面人
お目見得の女中のガスの使ひ振り　普天
土地會社ガスの設備がございます　孤蓬
萬年筆頻りと時計氣にして居　白面人
お世辭云ひ〳〵萬年筆を持ち直し　同
丸停の萬年筆の滲みよう　普天
署名する丈けの萬年筆を持ち　孤蓬
お隣りの猫叱らずに睨んどき　普天
猫の樣におとなしいのが醉ひ狂ひ　同
猫の子といつしよに子供伸びをする　孤蓬
自畫像へ一匹ペルシヤ猫を入れ　同

有恒川柳會　（大阪）

十二月十九日　寺井鋭々報

思案するのももどかしい十二月　波夢造
欄干で思案をつけてお汁粉へ　青美
物思ふ電車へ辨當忘れたり　雨月
思案は長くバット空になる　萬雷
修繕中にしては少々永すぎる　波夢造
修理中のラヂオに惜しいプログラム　同
靴直しほめると鋲を二ッ打ち　青美
修繕のきかぬ軀が長生きし　同
輪替屋は羅宇屋の笛にかき消され　同
つくろつた足袋が好きだと言ふ親爺　雨月

一月二十三日

中腰で火鉢に倚つた寒さなり　波夢造
重役は寒さ以上のオバーを着　紫葉
孝行な子に借金が殖えて行き　蛸三
孝行はいつ出來るのか四十なり　萬雷
肩たゝく子の孝行はすぐに飽き　同
利く方の手を上げて父喜びぬ　青美
稻荷壽司母の土產と受取られ　同
夕刊も賣り級長も勤める子　鋭々
よれ〳〵のズボンで畫家は母を連れ　青美
アパートに住み洋畫家といふ名だけ　鋭々
パトロンの好みで鶴を畫き添へる　波夢造

住友川柳會　（尼崎）

十二月十五日　橋本路風報

除夜の鐘三十三も無事にすみ　八櫻
大晦日さて人情は捨てゝ行こ　寄與史
金貸へ市電がのろい大晦日　美知夫
大晦日隣はそつと逃げたらし　路風
大晦日よくも一年頑張りし　文月
末の子は親子電氣を消し損ね　同
久々の義母へ電球つけかへる　美知夫
覺悟なら觸れて御覽じ千ボルト　幽篁
停電で母の叱言もストップし　同
姑の手で消されたり從量燈　美知夫
統電が休に響き子に響き　幽篁
難かしい宿題電氣下される　寄與史
電氣萬能神棚もスキッチで　辛雅
晩婚の一子を擧げて若がへり　幽篁
丙午後れながらも皆嫁ぎ　八櫻
晩婚の町で知られし教育家　川舟
晩婚は少々辛抱する氣なり　寄與史
晩婚をはずかしそうに祝はれる　八櫻
晩婚は親孝行で知られてゐ　路郎
空閑地先づ埋立はして置こう　川舟
空閑地背廛で鍬を持つもよし　寄與史
五錢の種がちと多すぎる空閑地　同
空閑地下手なラッパが鳴りひゞき　路郎
空閑地拔けてうちの子連れ歸り　同

麻生川柳早鐘句會　（大牟田）

一月六日　於早鐘講堂　高田抱逸報

ひよつとこになつて笑はす父の藝　清
朗かに笑つて一家みんな無事　梅春
第六感働く刑事笑ふのみ　實
もう一度笑つて見よと父笑ひ　末雄

赤ちやんの笑ひをシヤッター待つてゐる苦笑ひ我の不滿をおしかくしあるだけの皺を集めて祖父笑ひ萬才は客の笑ひで鬱となりほゝ笑めば兒もほゝ笑んで抱れる年寄りの苦勞笑つてまぎらかしホホ笑んで慰問袋をとりかこみ泣き笑ひ乘せて銀バス强く搖れ商賣のコツも覺えて出る笑ひ笑はせる父の素振に皆笑ひ氣狂がニツト笑つて淒くなり五圓札すばりチツプに出す氣前使ふには惜しい折目のない五圓日曜を輕い心の五圓札おだてられチツプになつた五圓札物價高使ひよけない五圓札五圓札くづした後の減る早さ饗錢に五圓札まである世相五圓札貰つた伯母の眼は潤み奉公へ國債買つた五圓札チツプには奮發すぎた五圓札つり錢がないと車掌の五圓札五圓札思つた程に使はれず滿員へキツテくれない五圓札

一月卅一日

お天氣をラヂオで聞いて傘と出る放送の寄席に家中泣かされる幼稚園ラヂオ體操だけ敎へ片足をペタルにおいてニュース聞くラヂオ又母の嫌いなジヤズバンド生活に負けまいとするラヂオ買ひスピーカー世界の動き持つてくる降ることをラヂオにきいて傘と出るラヂオ屋は聞かしておいて聞いてゐる落目でも七球つけて客を呼び虎造へ一家揃つて聞くラヂオヒツト〳〵ラヂオも共に走りそう戰勝のラヂオニュースに手を合せ萬才の聲するラヂオ少さくなり春場所になつてラヂオの忙しいアンテナの下でドイツの聲をきくアンテナへ今朝の豫報が降つてくる家中へそれぞれ用のあるラヂオ隣へも負けないラヂオ買つて來る

進　わかば
年之　初義
巳與吉　一秋
秋馬　竹下
一可　彌太
抱逸　一湖
十四之　同
清風　末俊
夢草　初舟
馬黨　梅春
龜水　一可
森本　失名
一秋　馬黨
平人　さゝを
五平　龜水
須惠夫　進
役太呂　瓦仙
茂洲　初舟
梅春　秀湖
清風　敏二呂
年之　一葉
抱逸

★★★★★ 記後 ★★★★★

▼一月號から國策に沿うて改型と誌面の刷新、内容の豊富と明朗化が、讀者諸賢の絶對的支持となり、賣れ行き激增を示めしてゐる。編輯の立場にあるもの、これ以上の歡びはない。

▼本號から「吟行地調べ、奈良篇」を發表することにした。この礎稿から更に詳しい現地調査の出來る仕組みにして、吟行に利用して貰ひたいと思つてゐる。奈良に關する句(名物をも含む)を諸君からも提出していただきたい。作品は新作でも舊作でもよろしい。(舊作は出所明記)この稿を作るために、特に縣の公園課長坂田靜夫氏並びに、觀光課の佐野三造氏の御援助を仰いだ事を深謝する。

▼戸田孤蓬氏の「川柳世界史」は記事輻輳のため一回休載。

▼私には日曜もなければ、祭日もない。あるものと云へば毎月一日か二日の散夜ぐらゐなものである。

▼飽れて後已むといふ言葉があるが、私は二月十九日(雨の日)阪大の句會から戻つて遂々寢込んでしまつた。ところが、廿二日の夜の川柳人協會後援西日本鐵道人川柳大會へ病床から拔け出て出席したのが祟つて、翌日から一層惡化し、廿七日の有恒川柳講座には全く動きがとれなくなつて休ませていただいた始末、病臥中も、雜誌の編輯は何んとかしなければ、首を長くして待つてゐる人たちのことを思へば氣が氣でない。漸くにして殘り五ページ分といふところまで漕ぎつけて、とう〳〵あとが續かなかつた。それは、それほどまでにして送稿してゐるのに、一ページも組んで呉れてゐないことを知つたからである。再び、あとの原稿に着手したが、もう運刊必至といふところまで追ひ込められてゐたのである。誠に申譯がないと思つてゐる。お宥しを乞ふ。

(病床にて路郎生)

★★社關係の人々★★

主幹
麻生路郎

賛助員
池澤樂居
長谷川一徹
大道弘雄
岡本一平
片岡直方
笠原路生
嘉納純
田中辰二
長崎柳秀
長岡半太郎
長野晴濱
藤村作
藤本卯之助
顕原退藏
淺田一
末弘巖太郎

客員
鳥山一歩
沖野岩三郎
大島濤明
大谷五花村
亀井晟修
川村花菱
米村あん馬
田村孝之介
谷脇素文
高尾亮雄
生方敏郎
窪田銀波樓
山本雨迷
安川久留美
前田五健
柴谷宰二郎
篠原春雨
蛭子省二
藤里好古
森東魚

不朽洞會員
橋本緑雨
高橋かほる
福田山雨樓
西田艸樂
永田里十九
奥村丹路
岩崎柳路
寺井鋭々
大西八歩
高澤一浪
戸田孤蓬
石井白面人
川出美根子
中島生々庵
戸倉普天
小畑自由朔
古川風竹
前山北海
古川覺花麗
岩崎山石
藤井友耶
米本貴志子
内藤草一郎
三輪晩翠
★大谷五花村
北山梧郎
水谷鮎美
清水友帆
松井円坊
姫田夕鐘
松夢裡
市嶺沒食子
吉田水車
妹尾八九満
須崎豆秋
春元紀太
西いわを
後藤青兒
宮岡白峰
石曾根民郎
中西おさむ
原史風
正本水客
黒川紫香
丸尾潮花
大坂形水
岩橋双虎
岡田某人
岩崎松代
田中雨月
平佐平三
橋本波夢遊
藤岡至藝瑠
増元翠陽
酒井斗風
北川春巣
布施筑川
小林橙舎
尾崎方正
佐竹香附子
押谷たけを
關根山彦
西尾桑
多田一波
櫻川不水
田中風葉
中原銑人
濱田久米雄
好崎申仙
杉原大研子
菊澤小松園
魚住滿潮
岩本雀踊子
松井円坊
石野秀雄
清水史路
西川愁水
内翠芳
多田市多樓
濱田賢次
森宗男
大森風來子
玉井彩泡
宮岡白峰
鈴木九灯
逸見坡竿
石原伯峯
西川青美
森本素木
植山九天
夷一笑

支部と幹事

道頓堀支部(大阪)萬よし
函館支部(函館)晟修
梅田支部(大阪)鮎美
簸川支部(島根)緑之助
鳥取支部(鳥取)鐵州
松山支部(松山)赫堂
天王寺支部(大阪)八九満
鶴町支部(大阪)双虎
御池橋支部(大阪)いわを
松江支部(松江)山川兒
大鐵局支部(大阪)水客
西條支部(愛媛)英賀夫
城南支部(大阪)申仙
今治支部(今治)文庫
光笑會(大阪)里十九
竹原支部(廣島)芳郎
廣島支部(廣島)風來子
豊中支部(豊中)紫香
下關支部(下關)半休
北鮮支部(羅津府)美笑
蒙彊支部(張家口)柳路
上海支部(中華)天作
鐵道病院支部(大阪)春巣
渚支部(大阪)翠花
四ッ橋支部(大阪)翠芳
布哇支部(布哇)魔花麗
堺支部(堺)角堂
岡山支部(岡山)九坡
尼崎支部(尼崎)美知夫

募集

第十八卷 第五號課題
三月廿日締切
(十句以内)
靴 高須啞三味選
共稼ぎ 長野文庫選

第十八卷 第六號課題
四月廿日締切
(十句以内)
代用食 福田山雨樓選
純綿 姫田夕鐘選

第十八卷 第七號課題
五月廿日締切
(十句以内)
古本 森東魚選
慰問袋 清水史路選

毎號募集(毎月五日締切)
近作柳樽(雑吟廿句) 麻生路郎選
川柳塔 麻生路郎選
同舟近詠
名地柳壇(會報)
文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の原紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲「近作柳樽」は全作家の雑吟を募る
▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。
▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事
▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
▲書體はなるべく楷書(川柳雑誌原稿)と封筒に朱記の事
▲締切は厳守されたし。
▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

川柳雑誌 第十八卷 第三號
毎月一回一日發行

定價
一冊 ㊐ 金三〇錢(送料一錢)
半ヶ年・六冊 金一圓六錢(特輯共)
一ヶ年・十二冊 金三圓六錢(特輯共)
御註文はすべて前金で願ひます。振替(大阪七五〇五〇)又は小爲替を御利用願ひます。御註文は何月號よりと御指示願ひます。轉居又は改號等の節は寄新併記の事
外國送本には海外郵送料實費の加算を乞ふ

昭和十六年二月廿五日印刷
昭和十六年三月一日發行

禁無斷轉載 本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

發行所 川柳雑誌社
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地(昭和ビル)
振替(大阪七五〇五〇)
電話土佐堀 三三三三番 八一六三番 八一六四番
編輯兼發行人 麻生幸二郎

廣告
本誌廣告に御用の節は川柳雑誌社廣告部へ御一報下さいますやう。

賣捌書店
(大阪)福音社 百貨店書籍部 明文堂 朝日ビル書店
其他市内各書店
(東京)東京堂 (神戸)米田寶文館 (函館)石塚
(京都)三宅(名古屋)靜觀堂

アサヒビール

大日本麦酒株式會社

含有滋味が
云々されて
更に愛飲される
アサヒビール
の眞價！

髮の美は
げに日本の姿なり

フケ・カユミを止め白髮・若禿を防ぎ明朗な青年美を創る

伊豆椿ポマード

伊豆椿香油本舗

大槻彩芳園

ガラス壜代用 紙容器

金屬代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・組立式各種・藥品・食料品・菓子等の容器として最適

大阪市住吉區晴明通二丁目四〇番地

二葉屋商店

電話事務所用（代）天下茶屋四二〇四番
四三〇二番

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）　昭和十六年二月廿五日印刷納本・昭和十六年三月一日發行

SENRYU ZASSHI

Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

りとびきに

美顔水

ニキビ

蚤・蚊・南京虫等の毒虫でカユい時！

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

▲ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の藥です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！ゼヒお勸めしたい藥です！

▲定價一瓶四十貳錢・六十錢錢・一瓶廿五錢。全國藥店にあり

ニキビ・吹出物に

ゼヒ此藥

阪大・京東

桃谷順天館

錢壹料送　錢拾參金價定(停)　誌雜柳川　NO・206